



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フランス福祉国家の思想的源流（１７８９～１９１０年）（５・完）　－社会経済学・社会的共和主義・連帯主義－
Author(s)	田中，拓道；TANAKA, Takuji
Citation	北大法学論集，56(2)，103-163
Issue Date	2005-07-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/15366
Type	departmental bulletin paper
File Information	56(2)_p103-163.pdf



論
説

フランス福祉国家の思想的源流（一七八九～一九一〇年）（五・完）

——社会経済学・社会的共和主義・連帯主義——

田中拓道

目次

序
第一章 社会問題

第二節 導入

第二節 革命期——〈市民的公共性〉と〈政治化された公共性〉

第三節 世紀転換期のイデオログ——「社会科学の公共性」

第四節 一八三〇年代——「社会問題」の登場

第二章 社会経済学——「新しい慈善」

第一節 導入

第二節 政治経済学

第三節 社会経済学

第一款 社会経済学用法史

第二款 社会経済学の秩序像

第三款 社会経済学の統治像

第四節 社会経済学の展開

第三章 社会的共和主義——「友愛」

第四章 連帯主義——「連帯」

第一節 導入

第二節 「連帯」の哲学

第三節 「連帯」イデオロギーの成立

第四節 「連帯」の制度化

第一款 フランス福祉国家形成史

第二款 言説の場の複数性

第三款 社会的なものの拮抗

結論

文献

(以上五十五卷二号)

(以上五十五卷四号)

(以上五十五卷五号)

(以上五十六卷一号)

(以上本号)

第四章 連帯主義——「連帯」

第四節 「連帯」の制度化

「連帯」の思想は、個人の自律を脅かす「リスク」への補償を社会の責任として構成する一方、社会全体の進歩という観点から個人の役割を意味づける。個人は、教育などを通じた「リスク」の最小化と、個別の職能の能動的充足を道徳的「義務」として担う存在と見なされる。⁽¹⁾ こうした個人への「リスク」補償と「社会化」を主に担うのは、共済組合・同業組合などの中間集団である。ただし「連帯」の思想では、権利保障を万人に拡張するために、国家による中間集団への指導や財政的補完が許容される。こうした思想に基づき、一八九〇年代末に主導権を握る急進共和派は、累進課税、住宅・衛生政策とならんで、病氣・労働災害・障害・老齢にたいする社会保険の導入を推進していく。

ただし、この時期の社会立法が、「連帯」の思想をそのまま反映して実現したわけではない。むしろ「連帯」の思想がコンセンサスを獲得せず、政治経済学、社会経済学、社会主義の拮抗関係の中で制度化がなされたという点に、フランス福祉国家の導入期の特徴がある。以下では、まずフランス福祉国家形成史にかんする近年の研究状況を整理し、本節の視角を提示する(第一款)。次に、「社会的なもの」にかかわる複数の思想潮流の場の制度化を踏まえ(第二款)、社会保険の導入をめぐる思想的対立について検討する(第三款)。

第一款 フランス福祉国家形成研究史

最初に、フランス福祉国家形成史の研究状況を整理する。エヴァルドやドンズロによって哲学的に読解されたフランス福祉国家形成史は、近年の実証研究の蓄積によって、より多面的な像が明らかにされている。これらの研究は、(一)保守主義的解釈、(二)自由主義的解釈、(三)急進主義的解釈に区別できる。

(一) 保守主義的解釈

P・ノードの整理によれば、これまで第一次世界大戦に至るフランス社会保障史は、産業化の緩慢な進展、小土地所有者・中小資本家の残存による普遍的制度の導入の遅れによって特徴づけられてきた。⁽²⁾ その社会立法は、いち早く国民皆保険制度を整えたドイツとの対抗関係を背景として、ナシヨナリストや保守派の主導によって実現した、とされる。とりわけノードは、M・スチュワートやS・ペダーソンなどの研究を踏まえ、フランスの特徴として、出生率向上と家父長的家族維持を目的とした児童福祉および家族給付制度の発達、公衆衛生の強化、という二点を挙げている。⁽³⁾ P・デュトンの研究も、二十世紀前半の社会カトリシズムの影響と家族福祉の発達に焦点を合わせている。⁽⁴⁾ T・スミスは、地方大都市の名望家層によるバターンリズムの残存によって、戦間期に至るまで、急進党の主導する国家単位の社会改革が進展せず、失業保険や一般的社会保障の導入の遅れがもたらされた、と説明している。⁽⁵⁾

フランスでこの分野の研究を代表するH・アツフェルによれば、十九世紀末に始まる社会保険の導入は、小生産者層の衰退による大産業資本家層のイニシアティブの確立によって実現したとされる。彼によれば、自由放任主義を唱える中小生産者層、非現実的なユートピアを唱える労働者階級にたいして、第三共和政中期に、大産業資本家(鉄道、炭鉱、鉄鋼業など)と高級官僚とのあいだで協調が実現し、労働者保護を目的とした労災・医療・年金保険の導入が図られた。⁽⁶⁾

（二）自由主義的解釈

こうした保守主義的解釈にたいして、S・エルウィットやJ・ホーンは、フランス福祉国家の「自由主義」的側面を強調する。エルウィットによれば、十九世紀末に、労働運動に対抗して秩序維持を図ろうとする産業家、経営者、技師などは、私的イニシアティヴに基づく社会教育、住宅供給、貯蓄金庫の整備を推進した。それは世紀転換期において、改革派官僚や急進共和派の支持を獲得し、私的イニシアティヴに基づく社会改革への「コンセンサス」を形成したという。こうした改革思想を、彼は「社会的自由主義」と称している。⁽⁷⁾ ホーンもまた、主として「社会資料館 (Musée social)」に集まる資本家、法律家、医師、共済組合主義者などに担われた、私的イニシアティヴと限定的な国家介入を組み合わせた改革思想を、イギリスやアメリカとの並行関係から、「新しい自由主義」「社会的自由主義」と称している。⁽⁸⁾

（三）急進主義的解釈

最後にJ・ストーンの研究は、議会での立法過程の検討から、穏健共和派に対抗する急進共和派の果たした役割の大きさを強調するものである。彼によれば、大産業資本家層の利害を代弁する穏健共和派は、一貫して国家介入に否定的であった。同じく国家介入に消極的な都市小生産者層を主要な基盤としながら、秩序維持を目的とした社会立法を図る急進共和派は、一方でA・ミランなどの修正社会主義勢力と連携し、他方では、反教権主義を軸に穏健共和派との協調を図り、支持層を農村部に広げることによって、一八九〇年代に議会内で主導権を握り、社会保険の導入をもたらした、という。⁽⁹⁾

以上のように、これまでの研究では、フランス福祉国家形成史は、（一）保守主義者のパターンリズムに基づく労働

者保護の試みとして、あるいは(二)大企業資本家の自由主義と結びついた限定的なリスク管理のテクノロジーとして、あるいは(三)国家介入を積極的に容認する急進共和派と修正社会主義との政治的連合の帰結として、把握されてきた。本稿では、以上の複数の解釈にたいして、保守主義、自由主義、急進主義という単一の枠組みではなく、「社会問題」への対応の中で語られてきた複数の思想潮流の拮抗関係を重視する。こうした視角は、近年の共済組合史研究において、社会保険の制度化をめぐる公的介入と私的イニシアティブとの対立が、二十世紀以降も持続した、と指摘されていることからも補強される⁽¹⁰⁾。この視角によれば、フランス福祉国家の導入期に見られる特徴は、単一の思想への「コンセンサス」にあるのではなく、むしろ政治経済学、社会経済学、連帯主義、社会主義の対抗、とりわけ社会経済学と連帯主義との拮抗関係が、制度のあり方を規定したという点に見出される。そこで以下では、それぞれの思想の語られた場と社会保険法への対応について検討する。

(1) 政治経済学・社会経済学は、パトロナージュ・宗教組織・家父長的家族による個人の「モラル化」を目指す。一方連帯主義では、公教育・社会教育・公衆衛生の啓蒙活動などによって、個人の「モラル化」が図られる。こうした働きかけは、「正常」と「異常」の区別によって正当化される。こうした区別の実践への応用については、第三共和政期の児童病理学とソーシャル・ワークの発展、精神分析学および犯罪学の隆盛を指摘するドンズロの議論が示唆的である。Jacques Donzelot, *La police des familles*, Paris, Editions de Minuit, 1977, Ch. 4, pp. 91-153 (宇波彰訳『家族に介入する社会—近代家族と国家の管理装置』新曜社、一九九一年、第四章、一一一—一九八頁)；« L'avenir du social », *Esprit*, Mars 1996, p. 63. なお、デュルケムによる「犯罪」現象の位置づけが、正常／異常の間で揺れ動き、当時の社会学の中で「犯罪社会学」が明確な位置づけを与えられなかったことは、「正常」な「モラル」を内面化した個人を前提とするという彼の理論体系全体に関わる問題であると考えられる。この点を含め、当時の犯罪学の展開については、デュルケム研究者ムキエリの編著による以下の研究がある。Laurent Mucchelli dir., *Histoire de la criminologie française*, Paris, Harmattan, 1994. 特にムキエリの論文«

- Naissance et déclin de la sociologie criminelle (1880-1940) », *op. cit.*, pp. 287-312 を参照。そこでは、『社会学年報』の「犯罪社会学」の項目をガストン・リシヤールが担当したものの、それは体系化に至らず、リシヤールが『社会学年報』を離脱する二十世紀初頭以降は衰退に向かったと指摘されている。
- (2) Philip Nord, “The Welfare State in France, 1870-1914”, *French Historical Studies*, vol. 18, no. 3, Spring 1994, pp. 821-838.
- (3) Mary Lynn Stewart, *Women, Work and the French State : Labour Protection and Social Patriarchy, 1879-1919*, Kingston, McGill-Queen's University Press, 1989 ; Susan Pedersen, *Family, Dependence, and the Origins of the Welfare State : Britain and France, 1914-1945*, Cambridge, Cambridge University Press, 1993.
- (4) Paul V. Dutton, *Origins of the French Welfare State : the Struggle for Social Reform in France, 1914-1947*, Cambridge, Cambridge University Press, 2002.
- (5) Timothy B. Smith, *Creating the Welfare State in France, 1880-1940*, Montreal and Kingston, McGill-Queen's University Press, 2003.
- (6) Henri Hatzfeld, *Du paupérisme à la sécurité sociale, 1850-1940 : essai sur les origines de la sécurité sociale en France*, Nancy, Presses Universitaires de Nancy, 1989, p. 263 et s., p. 295, etc. アンフェルによれば、C. G. T. などの労働運動は、直接行動の「だわりや、エートピア主義的傾向によって、立法化に直接の影響を及ぼせなかった (*ibid.*, p. 187 et s.)」。
- (7) Sanford Elwitt, *The Third Republic Defended : Bourgeois Reform in France, 1868-1914*, Baton Rouge, 1986, pp. 2-11, pp. 290-295.
- (8) Janet R. Horne, *A Social Laboratory for Modern France : the Musée social and the Rise of the Welfare State*, Durham and London, Duke University Press, 2002, p. 9.
- (9) Judith F. Stone, *The Search for Social Peace : Reform Legislation in France, 1890-1914*, Albany and New York, State University of New York Press, 1985, pp. 70-71. また邦語でのフランス福祉国家形成史の概説として、最近廣澤孝之『フランス「福祉国家」体制の形成』法律文化社、二〇〇五年、が公刊された。十九世紀末から現代までを叙述する同書は、本稿のアプローチとは全く異なるが、この分野の通説を的確に要約したものである。
- (10) ギボウ、ドレフュスの研究によれば、十九世紀末から二十世紀初頭に隆盛を迎える共済組合運動と、急進派の主導する社会保険の制度化との間には、対抗関係が生まれ続けた (Bernard Gibaud, *De la mutualité à la sécurité sociale : conflits et convergences*, Paris, Editions ouvrières, 1986, p. 55 et s. ; Bernard Gibaud, *Mutualité, assurances (1850-1914) : les enjeux*, Paris,

Economica, 1998, p. 120 et s.; Michel Dreyfus, Bernard Gibaud et André Gueslin dir., *Démocratie, solidarité et mutualité : autour de la loi de 1898*, Paris, Economica, 1999, pp. 313-314, etc.; Michel Dreyfus, *Liberté, Egalité, Mutualité : mutualisme et syndicalisme, 1852-1967*, Paris, Editions de l'Atelier, 2001. 同様の研究潮流として、Olivier Faure et Dominique Dessertine, *La maladie entre libéralisme et solidarité (1850-1940)*, Paris, Mutualité française, 1994 は、十九世紀以降に統治権力による管理の対象となっていく「病氣」に焦点を合わせ、私的慈善、公的扶助、共済組合という三つの対応が、十九世紀を通じて競合したこと、とりわけ共済組合と公権力による社会保険の制度化との間に対抗関係が生まれ続けたことを指摘している。七月王政期に熟練労働者や職人層を中心に発達した共済組合は、第二帝政以降労働組合から明確に分岐し、二十世紀初頭においても、その大部分は国家介入に否定的であった。共済組合が社会保険の義務化を承認し、フランス福祉国家の一部を担っているのは、第一次世界大戦を経た一九三〇年法においてであり、両者の関係が対立から協調へと変化するのには、第二次世界大戦以後のことである。

さらに、十九世紀末の共済組合主義、社会経済学、稳健共和派などの交流の場となった「社会資料館 (Musée social)」を対象とするシャンプランの編著、トバロフの編著、ホーンの著書では、この時期の改革論者の多様性―法律家、医者、学者、共済組合主義者、労働運動指導者など―と、急進共和派との対抗・協調関係が詳細に検討されている (Colette Chambelland dir., *Le musée social en son temps*, Paris, Presses de l'Ecole Normale Supérieure, 1998; Christian Topalov dir., *Laboratoires du nouveau siècle : la nébuleuse réformatrice et ses réseaux en France, 1880-1914*, Paris, Editions de l'Ecoles des Hautes Etudes en Sciences Sociales, 1999; Janet R. Horne, *A Social Laboratory for Modern France : the Musée Social and the Rise of the Welfare State*, Durham and London, Duke University Press, 2002)。

第二款 言説の場の複数性

「連帯主義」を担う急進共和派は、一八九五年にブルジョワ内閣、一八九九年にワルデック・ルソー内閣を成立させ

た。一九〇一年には、フランスで最初の全国政党となる急進―急進社会党が結成される⁽¹¹⁾。大学の世界では、一八九〇年代半ば以降に、デュルケーム社会学が支配的地位を確立していく。こうした連帯主義の隆盛にたいし、他の思想潮流は、それぞれ以下のような場において組織された。

第一に、政治経済学は、七月王政期から引き継がれた「道德政治科学アカデミー」、⁽¹²⁾「政治経済学協会 (Société d'économie politique)」および「経済学者雑誌 (Journal des économistes)」を、主要な場とする。ポール・ルロワールボーリウなどの政治経済学者は、産業の自由と国家介入の制限、とりわけ自由貿易の推進を主張したが、一八八〇年以降その影響力は限定的なものにとどまった⁽¹³⁾。

第二に、社会経済学は、ル・プレ学派の雑誌『社会改革 (Réforme sociale)』と、ル・プレ学派の刷新を試みる新しい世代の社会経済学者によって設立された「社会資料館 (Musée social)」を主要な場とした⁽¹⁴⁾。ここでは、ル・プレ学派のバトロナージュ論に代えて、共済組合・協働組合運動を基盤に据えようとした新しい世代の社会経済学者を中心に見ておきたい。

七月王政期に公権力や上層階級と結びついて形成された貯蓄金庫や共済組合 (mutualité, société de secours mutuel) は、第二帝政期に公権力の監視下で一定の発展を遂げ、第三共和政に入ると、主に穏健共和派と結びついて急速に拡大する⁽¹⁵⁾。この時期の共済組合は、単なる相互扶助にとどまらず、日常の集会や病人の介護、葬式の世話に至るまで、様々な社会的結合を提供する場として機能した⁽¹⁶⁾。この時期の共済組合運動を代表するイポリト・マズは、一八八一年十一月九日の議会で次のように述べている。共和国が無知・貧困と闘うためには、初等教育の組織化の次に、アソシアシオンの自由化を行う必要がある⁽¹⁷⁾。とりわけ貯蓄金庫と共済組合の活性化こそが、「貧窮を防ぐ唯一の手段である」。「貯蓄金庫は、民衆資本にとっての小学校である。共済組合は、この組織をモラルの観点から補完する」⁽¹⁸⁾。一八九八年四月一日には、

マズ、L・ブルジョワ、L・マビヨなどのイニシアティブによって、共済組合の自由化を定めたいわゆる「共済組合憲章 (Charte de la Mutualité)」が成立する。一九〇二年には全国組織「フランス共済組合国民連合 (FNMF : Fédération nationale de la mutualité française)」が結成され、加入者は三百万人から四百万人を数えるまでに発展した。

ジークフリード、マビヨ、エミール・シェイソンなど、この時期の共済組合・協同組合運動の主導者たちは、社会経済学に関する恒久的な研究教育機関を設置するために、一八八九年万国博覧会の展示を基に、ル・ブレの影響を受けた大資本家アルベル・ド・シャンブラン⁽²⁰⁾の協力を得て、「社会資料館 (Musée social)」を設立する。⁽¹⁹⁾規約第一条には、その目的が次のように掲げられている。「社会資料館協会の目的は、労働者の物質的・精神的状況の改善を目的および成果とするような、社会制度や社会組織の文書、草案、計画、法規などにかんする情報の提供と閲覧を、無料で公衆に供することにある」⁽²²⁾。そこでは、労働運動、協同組合、社会保険、経営者団体などに関する法令や資料が収集され、社会問題に関連する調査・講演・討議が定期的に行われた。図書館では、これらの資料の公開・閲覧が行われた。一八九七年に館長となるマビヨは、次のように述べている。「社会資料館は、まず何よりも人民の家でなければならず、集合的で意識的な生活の中心機関であるアソシアシオンの集結場所、その教育と進歩の道具でなければならぬ」⁽²³⁾。それは、公権力と直接結びついた大学と異なり、「人民」に開かれた私的研究教育機関として、第三共和政中期の共済組合主義者、協同組合主義者、穏健共和派など、社会経済学に連なる多様な人物の結節点となつた。⁽²⁴⁾

第三に、第二帝政下において共済組合運動から明確に分岐・自律していく労働運動は、一八八四年法による労働組合の自由化を経て、議会勢力と結びついた「全国労働組合・協同組合連盟 (Fédération nationale des syndicats et groupements coopératifs) (一八八六年)」や、「労働取引所全国連盟 (Fédération nationale des Bourses du travail)」(一八九二年)などの結成に至る。革命的サンディカリズムを唱えるF・ペルティエの影響を受けた「労働取引所」は、雇用紹介や相

互扶助だけでなく、相互教育、日常的会合、労働運動の拠点として機能し、初期サンディカリズム運動の中核を担った。⁽²⁵⁾ 世紀末の時点で、全国の労働組合と共済組合は、ほぼ同数を数えたと言われる。⁽²⁶⁾

以上のように、第三共和政中期には、急進党や大学を中心とした共和派知識人、私的イニシアティブによって設立された共済組合と社会資料館に集まる社会経済学者、労働組合や労働取引所において組織された労働者のそれぞれによって、「社会的なもの」に関わる思想の場が形成され、それらは相互に競合・拮抗関係にあった。こうした関係は、世紀転換期の社会保険の立法過程において顕在化していく。

(11) F. ビュイソンは、急進党綱領の解説において次のように言う。「急進主義の社会理論は、個性、特性、独自性を有する。

それは社会主義に近接しながらも異なる理念、すなわち『連帯』の理念に基礎を置く」(Ferdinand Buisson, *La politique radicale*, op. cit., p. 210)。具体的には、累進課税、社会保険、社会教育の推進などが「社会政策」の柱とされた。

(12) Yves Breton et Michel Lutfalla dir., *L'économie politique en France au 19^e siècle*, Paris, Economica, 1991, p. 316.

(13) Cf. Marc Penin, « Un solidarisme interventionniste : la Revue d'économie politique et la nébuleuse réformatrice, 1887-1914 », Topalov dir., *Laboratoires du nouveau siècle*, op. cit., p. 96.

(14) 『社会改革』や『社会経済学協会』は、E. シュイソン、ピコ (Georges Picot)、ルフェビュール (Léon Lefébure)、ギロ (Albert Gigot) などに担われ、一八九〇年代以降も支持者を拡大し続けた (Antoine Savoye, « Les paroles et les actes : les dirigeants de la Société d'économie sociale, 1883-1914 », Topalov dir., *Laboratoires du nouveau siècle*, op. cit., pp. 61-94 を参照)。ただし、ル・プレの社会経済学は主に手工業者を対象とし、この時期の大産業には適合しなくなっていた。一八六五年に設立された『社会経済学協会』の規約には、その目的が次のように記されている。「パリを本拠とする協会の目的は、事実の直接観察に基づき、あらゆる国々において、手工業に従事する者の肉体的・道徳的状态と、彼ら同士、あるいは彼らと異なる階級に属する人々とを結びつける諸関係を明らかにすることにある」(*Bulletin de la Société internationale des études pratiques d'économie sociale*, Paris, 1869)。

新しい世代の社会経済学者シェイソン、ジッド、シャルル・ロベール (Charles Robert) らは、パトロナージュに代えて共済組合・協同組合運動を基盤に据えることで、ル・ブレの思想を刷新していく。彼らの活動の場は、本文で述べる「社会資料館」のほかに、以下のようなものがあった。ジッドは一八八七年に、自由主義的政治経済学の機関紙「経済学者雑誌」に対抗する『政治経済学雑誌』(*Revue d'économie politique*) を創刊する。その初期の寄稿者の中には、介入主義を唱えるポール・コウエ (Paul Cauwès) のほか、デュギー、デュルケム、タルドなど、後に「社会学」を唱える人々もいた。

(Breton et Lutfalla dir., *L'économie politique en France au 19^e siècle*, op. cit., p. 319 ; Luc Marco dir., *Les revues d'économie en France (1751-1994)*, Paris, Harmattan, 1996, p. 164)。¹⁵ ただジッドは世紀転換期以降、協同組合運動や「社会経済学」の実践へのコミットを強め、雑誌の発刊を通じた「経済学」刷新への興味を失っていく。彼は一九〇三年の手紙の中で次のように語っている。「周囲の環境から、私は社会経済学の方へと向かい、純粋な経済学からますます離れるようになりました」(*Lettre de Charle Gide du 2 avril 1903, citée par Breton et Lutfalla dir., L'économie politique en France au 19^e siècle*, op. cit., p. 321)。¹⁶

さらにジッドは、シャンブランの援助を受けて、大学に「ジョレス「社会主義」とボーリウ「政治経済学」の間にある」「社会経済学」の講座を創設しようと試みたが、担当者となったエスピナスの講義が歴史的で抽象的なものにとどまることになり、これも失敗に終わる (Janet Horne, « Le Musée social à l'origine : les métamorphoses d'une idée », *Le mouvement social*, avril-juin, 1995, p. 62)。¹⁷ シェイソン、アナトール・ルロワ＝ボーリウ (Anatole Leroy-Beaulieu) など、社会経済学者の多くは大学ではなく、エッセール・ブートローの創設した私立政治科学院 (Ecole libre des sciences politiques) で教鞭を取った (Savoye, « Les paroles et les actes... », op. cit., p. 75)。¹⁸

(15) Dreyfus, Gibaud et Gueslin dir., *Démocratie, solidarité et mutualité*, op. cit., p. 9.

(16) Patricia Toucas-Truyen, *Histoire de la mutualité et des assurances : l'actualité d'un choix*, Paris, Editions la Découverte et Syros, 1998, p. 49.

(17) Anne-Marie Thomazeau, *Le pari solidaire : histoire de la mutualité*, Montreuil, Viva éditions, 1998, p. 63, p. 112.

(18) Hippolyte Maze, *La lutte contre la misère*, Paris, 1883, p. 112.

(19) シェイソンは、一八八九年万国博覧会で復活した「社会経済学」部門の報告書で、パトロナージュに代わるアンシアシオンの隆盛、国家の活動の停滞を指摘し、「社会経済学の展示は、…個人の活動の発展と、国家の活動を正当な範囲へと限

定する」とに貢献するであろう」(Emile Cheysson, *L'Economie sociale à l'Exposition universelle de 1889. Communication faite au congrès d'économie sociale le 13 juin 1889*, Paris, 1889, p. 22)°

(20) コント・アルベール・ド・シャンブラン (comte Dominique Albert Pineton de Chambrun, 1821-1899) は、一八二一年ロゼール (Lozéle) 地方の大貴族の家に生まれ、七月王政下では「道德政治科学アカデミー」会員との交流によって知的形成を行った。第二帝政期にはル・プレの強い影響を受け、後に次のように語っている。「ル・プレと我々…は、古い政治経済学に反対する若い社会経済学者である。生産の代わりに生産者を、物の代わりに人間を」(François Blum, « Le comte de Chambrun : catholique, mécène des protestants ? », *Le musée social en son temps*, op. cit., p. 35)。第三共和政期に入ると、稳健共和派の政治家と交流しながら、社会問題に取り組む新たな学問の樹立に尽力し、「社会資料館」への財政的支援を担った。シャンブランの生涯については以下を参照。Blum, « Le comte de Chambrun... », op. cit., pp. 27-41 ; Home, *A Social Laboratory for Modern France...*, op. cit., p. 86-92.

(21) シェイソン・ジークフリード (Jules Siegfried)・セイ (Léon Say)・シモン (Jules Simon) らは、当初共和国政府に働きかけを行ったが、政府が無関心なままにとどまったことで、シャンブランの私的財政援助を基金として設立に至った (Home, « Le Musée social à l'origine... », op. cit., p. 64)。通常の運営費は、主に寄付金と補助金で賄われた (規約第十三条)。

(22) « Statuts : annexes au décret du 31 août 1894 et modifiés par décret des 15 mai 1896 et 24 avril 1900 », dans Chabelland dir., *Le musée social en son temps*, op. cit., p. 376.

(23) Home, *A Social Laboratory for Modern France...*, op. cit., p. 141. レオポール・マビヨ (Léopold Mabilleau) は、九〇年代前半に公教育大臣を務め、一八九八年にコレージュ・ド・フランスの教授となる。一九〇二年に結成される「フランス共済組合全国連合 (FNMF : Fédération nationale de la mutualité française)」では初代代表を務めた。

(24) 社会資料館の性格づけは、実際には微妙な点を含んでいる。そこには社会経済学者 (ギゴなどのル・プレ学派、ジークフリード、ジッド、ロベールなどの社会キリスト教、マビヨ、マズなどの共済組合主義者) だけでなく、ブルジョワ、ギエス (Paul Guieysse) などの急進共和派、ジョレスなどの社会主義者に至るまで、イデオロギー的には幅広い論者が関わりを持った。こうした点から、ホーンは社会資料館を、政治的・イデオロギー的傾向を持たず、実証的方法に基づいて「社会改革」を志した論者の集まる「シンク・タンク」であった、と論じている (Home, *A Social Laboratory for Modern*

France..., op. cit., pp. 121-123)。しかしホーン自身も認めている通り、社会資料館は、保守的社会経済学に近い人びとのインシアティヴによつて、私的な財政援助の下に、万国博覧会の「社会経済学」部門を引き継いで設立された。理事会のメンバーとなったのは、ル・ブレ学派、社会プロテスタント、私立政治科学院 (Ecole libre des sciences sociales) の教授など、その多くが国家介入に批判的な立場の論者であった。社会資料館内部の人的交流に焦点を合わせたホーンのアプローチは、当時の言説空間全体の中で、この機関の占めた位置を明らかにする上では、未だ十分なものとは言えない。

(25) この時期の労働組合および労働運動の諸潮流について、谷川稔『フランス社会運動史ーアソシアシオンとサンディカリズム』山川出版社、一九八三年、第五章、第六章を参照。

(26) 一八九九年の時点で共済組合二二五二、労働組合二二四九であった (Michel Radelet, *Mutualisme et syndicalisme : ruptures et convergences de l'Ancien Régime à nos jours*, Paris, Presses Universitaires de France, 1991, p. 74)。

第三款 社会的なものの拮抗

「社会的なもの」をめぐる以上のような言説の場の複数性を踏まえ、社会保険法の導入をめぐる議論状況について検討する。

(一) 労働災害補償法

一八八〇年三月二十九日にマルタン・ナドによつて提案され、約二十年の討議を経て一八九八年四月九日に成立した(工場)労働災害補償法は、「職業的リスク (risque professionnel)」の概念を導入し、一八〇四年民法一三八二条から一三八四条における「過失 (faute)」責任原則を修正した、初めての社会権立法と位置づけられる⁽²⁸⁾。

ナドやフォール (Félix Faure) の提案は、産業労働の一般化による「社会問題」の質的な変化を明らかにした。⁽²⁹⁾ ナドによれば、手工業における事故は「個人のリスク」にすぎなかったが、工場での事故の多くは機械によって引き起こされる。この時期の議会討論をまとめたグリーの言葉によれば、「工場は、個別の場所と仕事を割り当てられた機械と人間から構成される、生きた有機体の如きものとなった」⁽³⁰⁾。こうした条件の下では、個人は工場の一部をなすにすぎず、労働災害とは、個人の「過失」の帰結ではなく、産業労働そのものに内在する「リスク」の発現と見なさなければならぬ。フォールは言う。「ここに真の過失は存在せず、労働から不可避に生じるリスクのみが存在する。したがって、責任を制限することは正当化される」⁽³¹⁾。彼らの提案によれば、「社会問題」とは、もはや「労働の権利」「生存の権利」にかかわる問題ではなく、むしろ産業社会に固有の条件から引き起こされる「リスク」への対処をめぐる問題となる。⁽³²⁾

「リスク」という語は、連帯主義の鍵概念である。⁽³³⁾ ルーヴィエによれば、「あなた方の提出した法案(労働補償法案)は、人間的連帯という偉大な原理から導かれた」⁽³⁴⁾。すでに述べたように、ブルジョワによれば、「連帯」の秩序は、産業社会における「労働する個人」を前提とする。こうした個人は、老齢や障害による労働からの離脱、「病氣、労働災害、強いられた失業」による労働からの一時的な退出を、不可避の「リスク」として抱えている。⁽³⁵⁾ 「連帯」を成り立たしめるためには、これらの「リスク」への補償責任を、社会全体が担わなければならない。ブルジョワは言う。「社会的リスクへの自発的かつ相互的な保険が、成員に同意され、受容されるところにしか、社会生活は存在しない。社会生活の進歩とは、まさにこの相互保険に関わる共通の対象・利益・リスクの範囲によって、測られるであろう」⁽³⁶⁾。

労災法案にたいして、政治経済学、社会経済学は激しい批判を展開した。政治経済学者ルロワ・ボーリウによれば、貧窮の原因は、「社会」ではなく個人の側にある。産業化や機械の導入などの「社会環境」の変化によってもたらされた貧困は、一時的現象にすぎない。それらは慈善、パトロナージュ、共済組合など、私的イニシアティヴによって対処

されるべき問題である。⁽³⁷⁾ 彼は一八九八年法を念頭に、次のように言う。「文明化―福利・科学的知・自由・正義などの人間社会における止むことのない発展―は、個人の自由、個人のイニシアティブ、私的・市民的・商業的アソシアシオンの多様さ……によってしか保障されないし、進展もしない」。⁽³⁸⁾ 個人的貧困への対処を法的義務とするならば、個人の責任感覚を喪失させ、「文明の衰退をもたらすだけ」である。⁽³⁹⁾

保守的社会経済学者のアルベール・ギゴ⁽⁴⁰⁾ (Albert Gigot) によれば、国家の介入はパトロナージユを衰退させ、個人の将来への配慮 (prévoyance) を阻害する。パトロナージユの流れを汲んで一八九三年に結成された「共済組合長全国同盟 (Union nationale des présidents de sociétés des secours mutuels)」では、保険のシステムは「エゴイズムと計算高々」を醸成する、として批判された。⁽⁴¹⁾

一方、社会経済学者の中でも、シェイソンやジッドなど、社会経済学の刷新を担った論者たちは、「職業的リスク」の概念を、大産業に限定して受容した。シェイソンによれば、「職業的リスク」の観念は、今や「ほぼ全員に受け入れられている」。⁽⁴³⁾ ただし保険の担い手は、国家ではなく、共済組合、協同組合、地域金庫などに委ねられるべきである。国家の役割は、使用者の保険加入を奨励し、監督を行うことに限定される。⁽⁴⁴⁾ シェイソン、ジークフリード、バルベレなどの主導で一八九〇年に結成された「共済組合連盟 (Ligue de la prévoyance et la mutualité)」では、共済組合と私的保険会社「リスク」処理という目的を共有する組織と捉えられた。⁽⁴⁵⁾ 「連盟」の代表者ルーティ (Victor Louties) は、一八九四年に次のように述べている。「財政的観点から見れば、保険会社と共済組合に違いはない」。⁽⁴⁶⁾

このように、社会経済学の内部には、共済組合をパトロナージユの延長上に捉えるのか、大産業に適合する「リスク」管理の組織と捉えるのか、という相違が存在した。それは、九〇年代初頭に結成された二つの共済組合の全国組織「組合長全国同盟」と「組合連盟」との対立にも反映している。ただし両者とも、職業集団内部の共同性を基盤とし、保険

を「リスク」管理の補助的手段と位置づける点では共通する。シェイソンによれば、「数学は、社会経済学の主人や基礎ではなく、補助であることが望ましい⁽⁴⁷⁾」。事故、疾病などの「リスク」は、対面的関係に基づく予防措置による軽減を優先すべきである⁽⁴⁸⁾。

労働災害補償法案は、急進共和派と、この法案に無関心な労働運動勢力と袂を別ったA・ミランなどの修正社会主義者との連携、および稳健共和派との妥協によって、最終的に一八九八年四月九日に法制化された。その内容は、無過失責任原則に基づき、使用者による労災への補償責任を定めたものの、特定の産業労働（工場、建築、鉄道、鉱山など）のみを対象とし、補償額は低く抑えられ、使用者による保険加入も任意にとどまるなど、社会経済学の主張を大幅に採り入れたものであった。

(二) 退職年金法

連帯主義と社会経済学との間に、より深刻な対立をもたらしたのは、一九〇一年五月十四日に、連帯主義者ポール・ギエス (Paul Guieysse) が提出した退職年金の義務化法案であった。この法案は、労働者・農民退職者にたいする国民金庫の設置と加入の義務化を定め、「リスク」概念を産業労働者から労働者・農民一般へと拡張し、さらに高齢を「リスク」の内に含めたものである。それは約十年にわたる急進共和派と政治経済学、社会経済学、社会主義との激しい対立を惹き起こし、上院での二度の否決を経た後に、最終的に一九一〇年三月二十二日に成立に至った。

この法案の趣旨を、ギエスは次のように説明している。彼によれば、個人と社会は相互に義務を担い合っている。個人は「それぞれの能力に応じて社会進歩に貢献する」義務を負い、社会は個人にたいして、労働の機会を保障し、個人の能力を最大限に発揮させる義務を負う⁽⁴⁹⁾。したがって、個人の自律を脅かす「リスク」への補償責任は、最終的に、公

権力が担わなければならない。「社会的連帯に基づく公役務 (service public) を設置することは、共和国の義務である。社会的連帯の原則は、二つの異なる制度を実現するよう喚起し、奨励する。すなわち保険と扶助である」⁽⁵⁰⁾。

ブルジョワによれば、老齡とは「規則的で、確實で、普遍的なリスク」であり、万人にかかわる以上、国家による補償を必要とする⁽⁵¹⁾。「国家 (nation) は万人に対して、病氣、事故、失業、障害、老齡のリスクにたいする完全な補償を行ったときにのみ、平和を享受する」⁽⁵²⁾。ブルジョワは、ジッ드의協同組合論を次のように批判する。「ジッ드의講演の中に、集合的エゴイズムの精神の驚くべき例を読み取るべきである。それは非常にしばしば協同組合を支配し、その成員が真剣に連帯の精神と取り違えているものである」⁽⁵³⁾。リスクへの補償を普遍的「權利」とするためには、共済組合の活動を国家によって補完しなければならない。

「国家は…普遍性と規則性を有している。…私的イニシアティヴは…その活動における情熱、創意工夫、柔軟さと、適用方法の無限の多様さによって利点を有している。国家が万人の各人にたいする義務という社会的性質を肯定するのにたいし、私的イニシアティヴは、各人の万人への義務という、重要さの劣らぬ社会的性質を肯定する。私にとっては、社会問題の解決そのものが、まさにこの二つの義務を遂行することにある」⁽⁵⁴⁾。

具体的には、個人による共済組合・地域金庫などの選択の自由を認めつつ、加入を義務づけることが提案される⁽⁵⁵⁾。

こうした連帯主義者の主張にたいして、社会経済学は次のように反論した。一八九五年の論文で、ドイツの保険制度を「社会的美德の破壊」と批判したシェイソン⁽⁵⁶⁾は、一九〇三年の「社会的連帯」と題された論文において、「連帯主義と社会主義」は同じ道であり、「社会的負債」という概念はあらゆる専制にとって便利な概念である、と述べる⁽⁵⁷⁾。シェイソンによれば、老齡問題とは、「大産業の発展」によって大家族が解体し、住宅・衛生環境の悪化がもたらされ、労働能力を持たない大量の孤立した個人が生み出されたことで顕在化した⁽⁵⁸⁾。しかしそれは、「社会」にとつての「負債」

ではなく、個々人の予見と、身近な人間の配慮によって対処されるべき問題である。すなわち、「家族、仕事場、職業団体、宗教組織、コミュニティ、地方（Province）」が、老齡問題への責任を負うべきである。⁽⁵⁹⁾同様にシャルル・ジッドは、レオン・ブルジョワの思想を「国家社会主義の強制的連帯主義」と称し、協同組合運動に立脚する自らの思想と区別する。⁽⁶⁰⁾

労働者・農民退職年金法は、急進共和派とミルラン、ヴィヴィアニなどの修正社会主義者との連携を中心に、上院での大幅な修正（国庫負担の軽減）を経て、一九一〇年三月二十二日に可決された。しかし、共済組合主義者のみならず、労働者の負担を忌避するサンディカリストやCGTも、この法にたいする激しい反対運動を展開した。こうした運動の前に、一九一〇年法は、義務化の不徹底と加入の停滞によって、形式的なものにとどまった。疾病・出産・障害・老齡・死亡を包括する社会保険の制度化は、第一次世界大戦を経た困窮・障害者の増大とナシヨナリズムの高揚を背景とする、一九二八―一九三〇年法の成立を待たなければならない。

以上のように、一八九〇年代から一九一〇年にかけて、社会問題への対応が争点となったとき、急進共和派に担われた「連帯」の思想は、これまで指摘されてきたような「コンセンサス」を形成したというよりも、むしろ複数の「社会的なもの」をめぐる拮抗関係の中で、制度化に至った。

第一に、政治経済学、ル・プレから引き継がれた保守的な社会経済学は、宗教、パトロナージュ、家族の役割を強調する。統計的計測に基づく保険や匿名の連帯は、上下階層間の温情と依存によって成り立つ対面的関係を掘り崩し、「モラル」の衰退を導くとして批判される。

第二に、ル・プレ学派を刷新する新しい社会経済学は、シェイソンやジッドのように、統計・保険の導入に肯定的な

立場を採る。ただし彼らは、「リスク」概念を特定の大産業のみに適合するものと捉え、職域ごとの多様性(パトローナージュ、同業組合、共済組合、協同組合など)を維持しようとする。「リスク」の普遍化、中間集団の範囲を超えた「権利」の概念化には否定的であり、国家による義務化には反対の立場を採る。彼らにとって、社会的紐帯とは、具体的・対面的関係に即した集団内部の共同性を基盤としなければならならず、統計や保険は補助的役割を担うにとどまる。

第三に、サンディカリズムは、国家の介入や負担の増大を、労働者階級の自律性を脅かすものとして批判し、社会保険法に反対の立場を採り続けた。

第四に、これらとの対抗関係において、社会保険の一般化を試みたのが連帯主義である。彼らは、一方で社会関係を機能的な相互依存関係にとらえつつ、他方では、その依存関係によって実現される社会の目的を「人間性の進歩」と想定し、その目的を個々人に優越するものと捉えることによって、社会関係の中にある個人が「人間性の進歩」への義務を担う、という観念を導いた。このような社会観は、具体的関係を離れた匿名の個人に「リスク」への補償という権利を承認すると同時に、彼らが教育、衛生、労働、貯蓄などの場面で道徳的「義務」を果たすことを要請するものであった。

少なくとも一九一〇年に至るまで、社会経済学と連帯主義は、互いに拮抗する関係にあった。こうした図式に変化がもたらされるのは、第一次大戦後のことである。この戦争によって生まれた膨大な傷痍軍人、戦争帰還者、戦争未亡人などへの対応は、もはや共済組合の範囲を超え、国家による介入の必要性が明らかとなっていく。一九一七年には、ドイツに編入されていたアルザス・ロレーヌ地方の返還が決まり、社会保険の整備の遅れが改めて問題化される。共済組合国民連合の代表者アルマン・サルモンは、一九二三年の大会で次のように述べる。「今や義務化を受け入れるしかない。我々の理想を最も広範に実現する唯一の手段として、それを受け入れよう」⁽⁶¹⁾。一九二六年から二八年にかけては、

CGT、CFTCも社会保険の立法化を承認する。こうして、一九二八年四月十二日法案の修正を経て、一九三〇年に、フランスで初めての包括的な社会保険法が成立する。ただしこの法案においても、共済組合、労働組合による独自の金庫設立と金庫管理の権限が認められ、国家の介入は財政上の必要に限定されるなど、組合主義的性格が強く刻印された。一九三二年五月一日に社会カトリシズムの影響で導入された家族給付制度とあわせて、フランス福祉国家は、普遍的権利保障を目指す連帯主義と、中間集団の自治による国家介入の制限を目指す社会経済学との対抗関係を内在させながら出発し、その基本的枠組みは、戦後の体制へと引き継がれていくことになった。

- (27) 労働災害問題が一般に認知される契機となったのは、一八八九年の万国博覧会で開催された「労働災害に関する国際会議 (Congrès international sur les accidents du travail)」である。この会議は、一八九一年に「労働災害と社会保険に関する国際会議」と名称を変え、社会保険の立法化を主要なアジェンダとした。
- (28) Ewald, *L'Etat providence*, op. cit., p. 245 et s.; Michel Lagrave dir., *La sécurité sociale : son histoire à travers les textes*, t. 2, 1870-1945, Paris, C. H. S. S., pp. 63-66.
- (29) Martin Nadaud, Proposition de la loi sur « les responsabilités des accidents dont les ouvriers sont victimes dans l'exercice de leur travail », Chambre des députés, dans Lagrave dir., *La sécurité sociale : son histoire...*, t. 2, op. cit., pp. 67-68; *Journal officiel*, 19 mai 1888, p. 1453.
- (30) Joseph Gély, *Etude générale sur le risque professionnel dans les accidents du travail*, Thèse pour le doctorat de l'Université de Toulouse, Toulouse, 1898, p. 1.
- (31) Faure, Chambre des députés, 1883, *Journal Officiel*, p. 528, cité par Ewald, *L'Etat providence*, op. cit., p. 289. 自由主義者ベランジェ (Beranger) も「大産業労働に限定して」「職業的リスク」の観念を次のように容認する。一八九六年一月二十八日の上院において、彼は言う。「使用者の過失、労働者の過失、両者の過失のほかに、誰の責任でもない膨大な数の事故が生じうる。これらの事故は、単に労働そのものの結果である。」(cité par Hatzeid, *Du paupérisme à la sécurité sociale*, op. cit., p. 37)。

- (32) Pierre Rosanvallon, *L'Etat en France : de 1789 à nos jours*, Paris, Seuil, 1990, p. 167.
- (33) Gély, *Etude générale sur le risque professionnel dans les accidents du travail*, op. cit., p. 63.
- (34) M. Rouvier, Chambre des députés, 13 mars 1883, *Journal Officiel*, p. 571, cité par Ewald, *L'Etat providence*, op. cit., p. 282.
- (35) Léon Bourgeois, *Essai d'une philosophie de solidarité*, Paris, 1907, pp. 86-87.
- (36) *Ibid.*, p. 44.
- (37) Paul Leroy-Beaulieu, *L'Etat moderne et ses fonctions*, 3^e éd., Paris, 1900, pp. 297-299.
- (38) *Ibid.*, p. 397.
- (39) ルロワ＝ボーリウによれば、大産業の発展が「匿名の社会」を生み出し、人びとの自発的紐帯を衰退させたことによつて、この国家への「幻想 (fantasme)」「神秘主義 (mysticisme)」が生まれた (*ibid.*, p. 365)。
- (40) Albert Gigot, « Les assurances ouvrières et le socialisme d'Etat », *La réforme sociale*, 3^e série, t. 9, 1^{er} juin, 1895, p. 846.
- (41) Gibaud, *Mutualité, assurances (1850-1914)*, op. cit., p. 121 ; Chambelland dir., *Le Musée social en son temps*, op. cit., p. 324.
- (42) たとえばジッドは、一九〇〇年パリ万国博覧会「社会経済学」部門の報告書の中で、ル・プルの組織した一八六七年の「社会経済学」部門が「バトロナーシュに特化された特殊なもの」であったと回顧している (Charles Gide, *Exposition universelle internationale de 1900 à Paris, Rapports du jury international, introduction générale, 6^e partie, économie sociale*, Paris, 1901, p. 7)。彼によれば、伝統集団に依拠するル・プルの思想は、もはや「共和国の習俗に合致しない」 (Charles Gide, *Economie sociale*, 3^e éd., Paris, 1907, p. 10)。「一八九〇年にジュネーヴで行われた講演「社会経済学の四潮流」でも、彼はル・プル学派を、家父長、使用者、教会の権威を強調する「権威学派」と規定し、より平等主義的なアソシアションを基礎とする自らの「新学派」と区別する (Charles Gide, « l'école nouvelle », dans *Quatre écoles d'économie sociale, Conférence faite à Genève, le 28 mars 1890*, Genève, 1890)。
- (43) Emile Cheysson, « La faute lourde en matière d'accidents du travail », *Œuvres choisies*, t. 2, Paris, 1911, p. 209.
- (44) Emile Cheysson, « La garantie de l'indemnité et la liberté de l'assurance », *Congrès international des accidents du travail à Milan, 1-6 octobre 1894*, Paris, 1895, p. 17.
- (45) M. Dreyfus, B. Gibaud., A. Gueslin dir., *Démocratie, solidarité et mutualité*, op. cit., p. 71.

- (46) Chambelland, *Le musée social en son temps*, op. cit., p. 319.
- (47) Toucas-Truyen, *Histoire de la mutualité et des assurances*, op. cit., p. 36.
- (48) Emile Cheysson, « Les rapports des lois d'assurances ouvrières et de la santé publique », *Exposition Universelle de 1900, Congrès International des Accidents du Travail et des Assurances Sociales*, 5^e session, Paris, 25 ou 30 juin 1900, pp. 2-4.
- (49) *Troisième rapport supplémentaire de M. Guieysse au nom de la commission d'assurance et de prévoyance sociales*, 31 janvier 1902.
- (50) P. Guieysse, *Chambre des députés*, 4 juin 1901, フランスで急進党の政策における「扶助」と「保険」の関係について補完してきたい。両者の関係は「別個」であるだけでなく、ビュイソンによれば、「扶助から保険へ」の移行は連帯主義の基本原則である。過渡期において、高齢者、障害者、廃疾者への公的扶助を強化することは必要であるが、財政の重点は、できるかぎり保険の側に移行することが望ましい (Buisson, *La politique radicale*, op. cit., pp. 254-255)。こうした考えは、「連帯」の思想の基本的な構造に由来している。すなわち「連帯」の秩序は、産業社会における分業化された役割を担う個人を前提とし、こうした個人の存立を脅かす「リスク」への補償を社会が担うことによって成り立つ。こうした相互関係の外部にある者への「権利」保障は、あくまで例外として位置づけられているにすぎない。実際フランス福祉国家においては、「社会保障 (sécurité sociale)」と「社会援助 (aide sociale)」とが別個の体系とされ、後者には重きが置かれてこなかった。こうした観点からすれば、一八九三年の無償医療法、一九〇五年の高齢者・障害者・廃疾者への扶助法の成立をもって、「厳密な意味での…社会権の最初の形式的承認」と位置づけるロザンヴァロンの議論には、留保が必要である (Pierre Rosanvallon, *L'Etat en France, de 1789 à nos jours*, Paris, Seuil, 1990, p. 175)。
- (51) Léon Bourgeois, *La mutualité et la lutte contre la tuberculose, Conférence faite au Musée social, le 6 novembre 1905*, Paris, 1906, p. 45.
- (52) Léon Bourgeois, « préface », Ferdinand Buisson, *La politique radicale : étude sur les doctrines du parti radical et radical-socialiste*, 1908, p. vi. 急進主義者が一八九八年五月の選挙にあたって発表した次の宣言も参照。「労働法によって、労働災害のみならず、失業、病氣、老齢にたいする…保護を保障しなければならぬ」(「Manifeste du Comité d'Action pour les Réformes Républicaines, Elections de mai 1898 », dans Buisson, *La politique radicale*, op. cit., p. 285)。
- (53) Bourgeois, « L'idée de solidarité et ses conséquences sociales », op. cit., p. 279.

- (54) Bourgeois, *La mutualité et la lutte contre la tuberculose*, op. cit., p. 44.
- (55) Léon Bourgeois, « Discours prononcé au banquet offert à M. L. Mabilieu, le 20 décembre 1901 », *La politique de la prévoyance sociale*, t. 1, *la doctrine et la méthode*, Paris, 1914, p. 157. 彼は次のようにも述べている。「私は国家の介入も制裁も、悪の感染を拡大させる無知とエゴイズムを防ぐ限りにおいてしか要求しなかった。予防と救済措置については、それが国家による直接的な、行政的な企てであることを望まない。それらを包摂するのではなく、むしろ援助することを望みたい」(Bourgeois, *La mutualité et la lutte contre la tuberculose*, op. cit., p. 43)。
- (56) Emile Cheysson, « Les assurances ouvrières », *La réforme sociale*, 3^e série, t. 10, 1^{er} octobre 1895, pp. 522.
- (57) Emile Cheysson, *La solidarité sociale, extrait de l'économiste français*, le 4 juillet, 1903, pp. 7-9.
- (58) Emile Cheysson, « L'évolution des idées et des systèmes de retraite », *La réforme sociale*, 16 février 1902, 5^e série, t. 3 (t. 18 collection), pp. 279-281.
- (59) Cheysson, « La famille, l'association et l'Etat », *Œuvres choisies*, op. cit., t. 2, p. 156.
- (60) シャルル・ジッド、シャルル・リスト『経済学説史(下)』東京堂、一九三八年、四三三頁。
- (61) Armand Salmon, *La mutualité et les assurances sociales*, Paris, 1926, p. 16.

結論

一九四六年十月二十七日の第四共和国憲法の条文は、次のように始まる。「フランスは、不可分の、世俗的、民主的、社会的な共和国である」(第一章第(1)条)。ここで言われる「社会的」とは、何を意味しているのだろうか。それはたんに、解放後大きな影響力を獲得した社会主義勢力の理念を指しているわけではない。(2)「社会的」という語は、十九世紀以降のフランス政治思想の鍵概念であった。法的主体としての宣言にとどまらず、社会的「平等」の実現を求める職人・

労働者層が、所有構造や生産構造の变革を訴えたのにたいし、支配層に属する論者たちもまた、フランス革命後に実質的な秩序を再建するために、個々人の振る舞いを規定する「社会」の「組織化」を模索し、こうした問題平面の上で、国家・法の役割を再定義していった。戦後フランス憲法に表れる「社会的」という語は、これらの探求のひとつの帰結を示すものに他ならない。

本稿は、フランス革命から二十世紀初頭にかけて、「社会問題」への対応を、自由放任主義と社会主義の間にたつて行おうとした支配層の諸思想を検討し、二十世紀のフランス福祉国家を準備した思想的過程を解明しようとするものであった。以下では、これまでの考察を要約し（一）、二十世紀以降の展開について、若干の言及を行っておきたい（二）。

（一）

第一章では、「貧困」への認識と対応を軸に、フランス革命初期の秩序像に孕まれた困難がどのように顕在化し、「社会問題」という認識の成立に至ったのかを検討した。

フランス革命初期には、旧体制下の「社团国家」像に代わり、自然権を有する自由な個人の討議と合意によって公権力が正統化される、という社会契約論的な秩序像が提唱された。本稿ではハーバーマスにしたがって、この時期に現れる「公共性」への新たな理解を「市民的公共性」と称し、革命中期以降それがどのように問い直されていったのかを検討した。

フランス革命初期の秩序像に孕まれた困難は、「人民（people）」概念の両義性に示される。「人民」とは、十八世紀後半以降、統治権力の正統性の源泉となる単一の集合を指示する語として用いられた。その一方で、この語は、貧民や下層民を指す概念でもあった。フランス革命以降、政治的秩序の正統性の源泉を「人民」という理念的集合に求める思

想は、そうした統治主体が事実上は不在であり、「人民」の意志を何らかの形で「表象」すること、あるいは「創出」することを課題として出発した。

革命初期の自由主義者が、啓蒙Ⅱ教育（コンドルセ）や代表（シイエス）という機制によって、法的理念としての平等と、事実的不平等との乖離を媒介しようとしたのにたいし、革命中期の共和主義者は、国民教育や祝祭を通じた祖国愛（「友愛」の精神）の涵養、「公共精神」の強調、国家による生存権の保障によって、共和国を支える「市民」を、公権力の手で創出・維持することを主張した（人間の「再生」論）。統治権力と直接結合するこの「公共性」への理解を、本稿では「政治化された公共性」と称した。

総裁政府期から世紀転換期にかけてのイデオログの思想は、革命中期の「政治化」された秩序像にたいして、統治権力を規制しうる原理を、「社会」の自律的な秩序法則の内に求めたものと位置づけられる。彼らによれば、「公的利益」とは、知的エリートの主導する「社会の科学」によって発見される（「社会科学の公共性」）。「科学」に基づく「社会法則」の発見と、統治の合理化によって、秩序の再建が可能となるはずである。王立科学アカデミーで「社会数学」を唱えたコンドルセ、その思想を引き継ぎ、フランス学士院道德政治科学部門において「社会生理学」を唱えたカバニス、政治経済学を唱えたトラシの思想は、「社会」に関する知と権力との結びつきをもたらし、十九世紀以降の思想の基本的な問題構成―観察可能な現象のみを対象とし、その外部にある超越的規範を問わないこと、現象間に働く「法則」のみを問題とすること、社会全体の秩序維持にとつての「有用性」を権力の正統性の根拠とすること、統治行為を「社会法則」の認識に基づく「治療」として捉えること―を提供した。

一八三〇年代に入ると、産業化・都市化の進展による膨大な都市貧民層の出現を背景として、「社会」の具体的「組織化」が課題となる。ギゾーなどの七月王政支配層が、政治的領域と社会的領域を区別し、社会の「文明化」という運

動法則を代表する中間階層を新たな政治的支配層と想定したのにたいし、一部の思想家は、産業化とともに現れた「大衆的貧困 (paupérisme)」を、「文明化」を脅かす「全く新しい」問題ととらえた。それは個人の無知・怠惰を原因とする従来の貧困と異なり、社会の「構造」から引き起こされた集合的現象である。それは伝統的慈善 (宗教)、産業の自由 (経済)、法的慈善・博愛主義 (国家) によつては解決不可能な問題であり、それらと異なる秩序基盤、すなわち「社会」の「問題」と認識される。ここで「社会」とは、生活習慣、労働規律、衛生習慣、家族形態、飲酒・貯蓄習慣など、個人を取り巻き、その行動を規定する集合的な精神状態を指し、それらは「モラル」として総称される。「大衆的貧困」は、集合的「モラル」の頹廃によつて生まれ、秩序を脅かす擾乱や犯罪の可能性 (危険) と識別不可能な形で結びついている。「社会問題」への対応とは、こうした集合的「モラル」を観察し、それらに関する知を蓄積し、それらを組織的に改善すること (「モラル化」) に見出される。国家の役割は、家族・中間集団 (宗教組織、共済組合、労働組合、地方団体など) と同一の平面上に位置づけなおされ、「社会の組織化」という問題構成の上で再定義される。社会的秩序とは、「公的」という規範的意味に支えられるのではなく、秩序を攪乱する諸要因を発見する知、こうした知の蓄積に基づく介入の絶えざる実践によつて、事実に保持されるものと捉えられる。本稿では、このように理解された統治権力のあり方を「社会化」と称し、それによつて成り立つ秩序像を「社会化された公共性」と称した。

第二章から第四章では、以上の問題構成において語られた十九世紀支配層の諸思想を、「政治経済学 (économie politique)」「社会経済学 (économie sociale)」「社会的共和主義 (républicanisme social)」「連帯主義 (solidarisme)」の四つに区分し、後者の三つの思想における鍵概念を「新しい慈善 (charité nouvelle)」「友愛 (fraternité)」「連帯 (solidarité)」と称して、比較考察した。

第二章では、七月王政期に「政治経済学」から分岐し、支配層による「社会問題」への主たる対応を担った「社会経

「政治経済学」について検討した。この思想は、七月王政期支配層のうちでも行政官、経済学者、統計学者、博愛主義者など実践に近い立場にあり、主に「道德政治科学アカデミー」の周囲に集まった人びとによって担われる。

「政治経済学」とは、十八世紀後半に至るまで、人民の安寧と国富の増大を目的とした農業・租税・財政・価格統制・公衆衛生などにかかわる統治行為一般を対象としていた。それは十九世紀初頭以降、富の生産・配分から成る「自律的」秩序へと対象を限定し、その法則を阻害する要素を体系の外部へと捨象していった。セイ、デュノワイエらによれば、政治経済学の目的とは、本質的事象と例外的事象とを区別し、物理学や生理学に比する経済現象の一般「法則」を明らかにすることにある。ドロズ、デュパン、フィクスなど七月王政期の政治経済学者は、産業の自由による「進歩」を普遍的「法則」と解し、階層化の進展を、競争を促進するものとして肯定する。貧困問題とは、個人の無知・怠惰や、産業の自由を阻害する公権力の介入によって生じたものに他ならない。秩序維持のために必要なことは、公権力の拡大ではなく、家父長的家族、宗教組織、パトロナージュなどの伝統組織を通じて下層階級「モラル」に働きかけ、彼らに自己規律、貯蓄習慣、未来の「進歩」へのコミットメントを内面化させることである。

「社会経済学」は、十九世紀初頭の政治経済学の意味変容に由来し、そこで捨象された要素を引き受ける「統治の学」（シスモンディ）として、七月王政期以降に政治経済学から分岐していった思想と位置づけられる。社会経済学者は、「富」の拡大と人民の「幸福」とを峻別し、「進歩」や一般「法則」という抽象的観念への懐疑を語る。上下階層から成る伝統集団の「共同性」の維持を重視し、宗教的慈善と異なる「新しい慈善」の一般的組織化を行うために、下層階級的生活状態の参与観察と、実践的知の蓄積を重視する。こうした新しい「社会科学」にしたがって、貧民の生活状態を同一の表の上に分類し、公的・私的実践を配置し、有機的に結合することが目指される。具体的には、家族、宗教組織、パトロナージュ、協同組合、共済組合などの多様な中間集団の活性化によって、一方では産業化の負の側面を抑止

し、他方では、国家介入を一定の範囲に限定することが目指される。「社会問題」への対処は、「権利」の問題ではなく、中間集団内部の「共同性」の再構築の問題と捉えられる。

七月王政期において、支配層の政治経済学と労働運動との対立を媒介しようとした社会経済学の試みは、四八年二月革命によって一旦挫折する。それは第二帝政期以降、「社会経済学協会」を設立する保守的社会経済学者ル・プレの手によって復活し、第三共和政期には、より平等主義的な思想を唱えるジッドやシェイソン、共済組合運動などへと引き継がれ、「社会資料館 (Musée social)」の周囲に組織されて、世紀転換期に隆盛を迎える。

第三章では、七月王政期に、支配層の政治経済学、社会経済学に対抗し、人民の一体性の基礎となる「平等」の実質化を求めた「社会的共和主義」について検討した。本稿では、具体的な生活利害に立脚してアソシアシオン運動を展開した職人・労働者層と、ロマン主義的・宗教的観念に訴えて政治運動を展開した共和派知識人とを区別した。後者は「人権協会」や共和派雑誌『ナシオン』『レフォルム』などの周囲に集まったジャーナリスト、著述家、法律家、政治家などに担われる。彼らはフランス革命期に宣言された法の「抽象性」を批判し、「社会」それ自体を平等な共同体へと変革することを主張する。そこでは社会的紐帯と政治的集合が同一の論理によって語られ、「人類」人間性 (Humanité) の観念が社会統合の宗教的象徴として措定される。それは実質的には、「友愛」の絆で結ばれた政治的共同体、すなわち「ナシオン」や「祖国」へと民衆層を統合するための論理として機能した。家族・アソシアシオンの社会的役割 (貯蓄、相互扶助、再配分など) は、国家によって引き受けられ、公権力の介入による「社会問題」の解決、とりわけ労働の権利と普通選挙権の実現が目指される。

「友愛」の共和主義は、「人類」「ナシオン」というロマン主義的概念を媒介することで、社会経済学を超える社会全体の統合の論理を提供した。その一部は、皇帝を統合の宗教的象徴と位置づけ、直接普通選挙と「デモクラシー」によ

る統治の正当化を図るナポレオン三世の秩序像に引き継がれた。ルイ・ボナパルト・ナポレオンのクーデタを経た第二帝政下の共和主義者は、「人類」「ナシオン」などのロマン主義的な象徴による統合、「友愛」という想像的紐帯、普通選挙権、社会政策の漸進的实现などに共和主義の基盤を求めることができず、より原理的な次元における共和主義の弁証を迫られた。

第四章では、第二帝政末期の共和主義哲学者による「社会」像の原理的探求と、第三共和政中期の思想家によるその通俗化・イデオロギー化の過程を、「連帯主義」という枠組みにおいて検討した。第二帝政期のルヌーヴィエ、フイエなどは、四八年世代の共和主義者におけるロマン主義的・宗教的傾向を否定し、社会的紐帯の基礎となる「連帯」を哲学的に導出しようと試みる。ルヌーヴィエは、「人間性」「人格」を、あらゆる現象を包摂する認識の「カテゴリー」と措定する。この「カテゴリー」を通してみたとき、「社会」が「人間性の進歩」を目的とする差異化された人びとの相互依存関係として構成され、自己と他者が独立の「人格」を有する対称的存在として立ち現れる。フイエは「社会」を、「人間性」の実現に向けた相互依存から成る有機体であると同時に、個々人の「準契約」に支えられる自発的集合と捉えた。「人間性」の観念とは、個人の選択を通じて実現される集合的な力―「力としての観念 (idée-force)」―である。このように、「人間性」の観念を社会認識の前提であると同時に、個々人の選択を通じて実現される規範としての位置に置くことで、彼らは個人―社会関係の新たな把握をもたらした。

第三共和政中期の急進共和派に近い立場の論者は、「連帯」の思想を、産業社会に適合するイデオロギーとして語った。急進共和派を代表するブルジョワは、特定の職能を担う人びとの相互依存を「連帯」と称し、そこから遡及して、個人の権利・義務を導出した。社会は、集合的秩序の維持を目的として、個人が遭遇する病氣・事故・失業・老齢などを集合的「リスク」の発現と捉えなおし、それへの補償責任を担う。一方個人は、産業社会において与えられた職能を

充足し、教育・公衆衛生などを通じて自己を「社会化」し、「リスク」を最小化し、社会の「進歩」に貢献する、という義務を負う。デュルケーム社会学は、こうした「連帯」の思想を大学において制度化し、そこに知的正当性を付与するものであったと位置づけられる。彼によれば、分業にともなう相互依存関係としての「有機的連帯」は、個別の社会的役割を能動的に担う「正常」な「モラル」(「道徳的個人主義」)を内面化した個人と、「異常」な状態にある個人への働きかけ・矯正によって成り立つ。こうした働きかけは、同業組合などの中間集団に委ねられ、国家は「連帯」の法則をよりよく表現する補助的機関として、中間集団の監視や教育などの役割を担うにとどまる。

以上のような「連帯」の思想は、一八九〇年代末に議会内で主導権を握る急進共和派によって、社会保険法を正当化する論理として用いられた。本稿では、世紀転換期において、急進党や大学に担われた連帯主義、共済組合や社会資料館を中心に担われた社会経済学、労働組合・労働取引所などに組織された社会主義、政治経済学協会・『経済学者雑誌』などに組織された政治経済学の相互の拮抗関係を指摘した。社会保険法の成立過程は、こうした拮抗関係の中で把握されなければならない。一八九八年労働災害補償法は、「職業的リスク」に基づく立法を許容する新しい世代の社会経済学(シェイソン、ジッドなど)・連帯主義と、それを自発的「モラル」の衰退につながると批判する政治経済学・保守的社会経済学と対抗関係の中で成立した。一九一〇年退職年金法は、国家介入を批判する政治経済学・社会経済学・サンディカリズムと、「リスク」の普遍化を目指す連帯主義・修正社会主義との対抗関係の中で制度化された。フランス福祉国家の原型は、「連帯」を表象する国家と中間集団の相互補完によって普遍的「社会権」の実現を目指す連帯主義と、対面的関係に基づく中間集団の自治を唱える社会経済学との拮抗関係を軸として、複数の思想の対立を内在させたまま制度化され、その基本構造は、一九三〇年社会保障法から、戦後の体制へと引き継がれていくことになった。

(二)

以上のように、フランス福祉国家は、匿名の諸個人の相互依存、「リスク」の社会化、抽象的「人間性」へのコミットメントなど、「連帯」の思想の唱える社会像を基礎としながらも、実際には社会経済学の主張を採り入れ、両者の拮抗関係を保ったまま制度化された。こうした特徴は、二十世紀以降の展開を考察するに当たって、何を示唆できるであろうか。ここでは三つの論点を素描することで、結論に代えたい。

第一に、「連帯」の思想がコンセンサスを確立できず、社会経済学との拮抗関係の中で、ナショナリズムの高揚を背景として制度化された、という特徴は、戦後福祉国家への国民的合意を調達する上では、むしろ積極的に作用したと考えられる。ロザンヴァロンの指摘するとおり、一九四六年法は、戦前の体制の「諸原理にたいして、何ら根本的な変化を示していない」⁽³⁾。一九四五―四六年のピエール・ラロック構想は、ベバリッジの影響の下で、金庫の「一元化」と社会保障の「一般化」を推進しようとするものであった。しかしその構想は、労働組合、共済組合の強い反対に遭い、広範な合意を獲得することに失敗した。戦後フランス福祉国家は、給与所得者を対象とする一般制度のほかに、自営業者・農民を対象とする独立制度、従来から存在する特定産業労働者を対象とする特別制度を並存させるなど、著しい制度的分立を維持したまま発展していった。社会保障金庫は、一九四八年の職域金庫法を契機として、単一金庫制を放棄し、職域ごとの金庫の分立と自治に委ねられることになった。その財源は、主に労使の拠出によってまかなわれ、国家の社会支出の伸びは緩慢なものにとどまった。このように、戦後の福祉国家を支えるとされる「連帯」⁽⁴⁾の理念は、実際には、国家による一元的管理と中間集団自治、社会保険と社会扶助の関係など、多くの点において曖昧な部分を含んでいた。むしろそれゆえに、戦後の経済成長を背景とすることで、フランス型福祉国家への「国民的」な合意の形成に寄与することができた、と考えられる。

第二に、「栄光の三十年 (Trente glorieux)」と称される経済成長の終焉とともに、一九七〇年代以降に顕在化する「福祉国家の危機」は、こうした合意への根源的な問い直しを惹起している。しかしそれが、「連帯」の理念そのものの否定を含意しているのかどうかは、明らかではない。「福祉国家の危機」の背景には、社会支出の肥大化や財政構造の悪化のみならず、家族構造・産業構造の変化、国民意識の衰退、医療技術の進歩による病氣などの「リスク」の個人化など、多様な要因が指摘されている。⁽⁵⁾ それへの対応は、一方において、国家による社会保障財源の「一元化」と、制度的分立の克服および「効率化」として追求されている。たとえば、八〇年代以降の医療・年金支出の削減、一般福祉税の導入 (一九九一年)、社会保障財政法による金庫管理一元化 (一九九六年) などである。しかし、こうした改革の方向性が、社会的な合意を得ているかどうかについては不確かであるのみならず、それがフランス福祉国家の原理におけるいかなる変容を意味しているのかについても、未だ明確ではない。

実際、フランス福祉国家の正統性の危機とは、単なる財政的危機を指しているわけではない。それは主に、従来の職域集団から成る「保険的福祉国家」の対象とならない人々、すなわち若年失業者、無資格者、長期失業者など、膨大な層の「排除された人々 (Exclus)」の出現を背景としている。⁽⁶⁾ こうした「排除」は、従来の職域保険の硬直性と、国家の肥大化にたいする批判を同時に生み出している。それへの対応の場面では、再び「連帯」の理念が喚起され、地域コミュニティの活性化、県単位の「社会参入最低所得 (Revenue minimum d'insertion)」の導入、NGO・アソシオンと地方自治体の協力、第三セクターの活用など、多様な中間集団を介した包摂戦略が展開されている。⁽⁷⁾ こうした動向が、どの程度の射程を有するかについては、今後の詳しい検討に委ねざるをえない。少なくともそこに示されることは、現代フランス福祉国家の再編論が、戦後体制の制度的分立の克服と効率化 (近代化) といった単線的な論理によって把握されうるものではなく、むしろ十九世紀以降に形成されてきた思想的伝統とその刷新という視角において、より原理

的な検討を必要としている、ということである。

第三に、以上の視角からみた場合、現代フランス福祉国家の再編過程においても、本稿で考察してきた複数の思想的伝統―産業の自由を重視する政治経済学、保守主義から生まれた社会経済学、ロマン主義的なナショナリズムと結びついた「友愛」思想（社会的共和主義）、抽象的「人間主義」と「進歩」の観念に立脚する「連帯」思想―の対抗関係は、形を変えて持続し反復していると捉えることができる。同時に、今後の福祉国家再編を展望するにあたっては、これらの伝統の刷新のみならず、その限界をも考慮に入れていかなければならない。たとえば、「連帯」の理念が前提とする抽象的「人間性」や社会全体の「進歩」という観念は、今後どれほどコンセンサスを得られるであろうか。社会による「リスク」補償と個人の道徳的「義務」を、社会全体の「進歩」という観点から結びつける論理構成は、新たな「排除」を生み出す危険を内在していないであろうか。こうした関心から見たとき、本稿で考察してきた「支配層」の唱える諸思想にたいして、十九世紀のもうひとつの思想的源流―すなわち、ブルードンのアソシアシオニズムの伝統―の可能性が、視野の内に浮上してくることになるであろう。

(丁)

- (1) この条文は、一九五八年十月四日の第五共和国憲法にも引き継がれる。「フランスは、不可分の、世俗的、民主的、社会的な共和国である」(第一条)。
- (2) Michel Borgetto et Robert Lafore, *La république sociale : contribution à l'étude de la question démocratique en France*, Paris, Presses Universitaires de France, 2000, p. 2.
- (3) Pierre Rosanvalon, *L'État en France : de 1789 à nos jours*, Paris, Seuil, p. 186.
- (4) 「社会保障の設立」を定めた一九四五年十一月四日のオールドナンスや、社会保障法百十一条一項によれば、「社会保障の

組織は、国民的連帯 (solidarité nationale) の原則に基づく」とされる。

- (5) Pierre Rosanvallon, *La nouvelle question sociale*, Paris, Seuil, 1995.
- (6) 「排除」にかんしては、Jacques Donzelot, *Face à l'exclusion : le modèle français*, Paris, Editions Esprit, 1991 ; Serge Paugam, *L'Exclusion : l'état des savoirs*, Paris, Découverte, 1996 など参照。
- (7) RMIにかんしては、以下が詳しい。Maryse Badel, *Le droit social à l'épreuve du Revenue minimum d'insertion*, Bordeaux, Presses Universitaires de Bordeaux, 1996 ; 都留民子『フランスの貧困と社会保護－参入最低限所得 (RMI) への途とその経緯』法律文化社、二〇〇〇年。地域政策については、以下を参照。Jacques Donzelot et Philippe Estèbe, *L'Etat animateur : essai sur la politique de la ville*, Paris, Editions Esprit, 1994.
- (8) たとえばトンズロは、「連帯」の思想が当初から「排除」への強迫を背景とすることで制度化された」と指摘している。Jacques Donzelot, « L'avenir du social », *Esprit*, Mars 1996, p. 63.

文 献

※以下は網羅的な目録ではなく、本文・脚注で言及するか、本稿の内容に直接の示唆を与えた文献のみを挙げている。翻訳のある欧語文献については、原典を参照したものは欧語文献に、翻訳を参照したものは邦語文献に入れた。

一 文献案内

フランス社会保護史に関して、以下の編者が基本情報を提供している。Michel Guillaume, dir., *La sécurité sociale : son histoire à travers les textes*, t. 1, 1780-1870, Paris, Association pour l'étude de l'Histoire de la Sécurité Sociale, 1988 ; Michel Lagrave, dir., *La sécurité sociale : son histoire à travers les textes*, t. 2, 1870-1945 ; Alain Barjot dir., *La sécurité sociale : son histoire à travers les textes*, t. 3, 1945-1981. 入門的目録として、Jean Imbert, *Guide du chercheur en histoire de la protection sociale (1789-1914)*, 2 vol. Paris, Comité d'Histoire de la Sécurité Sociale, 1997。包括的な目録として、Nadine Dada, *Bibliographie pour servir à l'histoire de la sécurité sociale, de l'assistance et de la mutualité en France, de 1789 à nos jours*, 16

vol., Bordeaux, Société des Bibliophiles de Guyenne, 1980 (t. 1 : Ouvrages (2 vol.) ; t. 2 : Articles et revues ; t. 3 : Les travaux parlementaires et les actes des autorités de l'exécutif (13 vol.)) がある。フランス国家史について、《Orientation bibliographique》, dans Pierre Rosanvallon, *L'Etat en France : de 1789 à nos jours*, Paris, Seuil, 1990, pp. 301-361 が基本文献を網羅している。日本に所蔵されている十九世紀フランス社会思想史に関する代表的コレクションの目録として、以下の三点を挙げておく。坂田太郎は『フランス社会思想史文献目録—小樽商科大学所蔵手塚文庫目録』(春秋社、一九六六年)；『菊池勇夫名誉教授蔵書目録』(一九六九年(九州大学所蔵))；*Goldsmiths'-Kress Library of economic literature*, 9 vol., New Haven, Conn., Research Publications, 1974-2000 (一橋大学社会科学古典センター所蔵)。

二 刊行資料 (定期刊行物等)

Association Catholique, 1885, 1889-1890.

Bulletin de la République, 1848.

Bulletin de la Société internationale des études pratiques d'économie sociale, Paris, 1865-1869.

La critique philosophique, politique, scientifique, littéraire, revue hebdomadaire, 36 vol., 1872-1889.

Démocratie pacifique, 1848.

Gazette de France, 1831, 1837.

Journal Officiel.

Mémoires de l'académie royale des sciences morales et politiques de l'Institut de France, 1837-1847.

Le national, 1840-1848.

La Réforme, 1848.

La réforme sociale, 1867-1868, 1895-1900.

Revue des Deux Mondes, 1831, 1898.

三 欧語文献 (著書、論文、辞典等)

- Agulhon, Maurice, *1848 ou l'apprentissage de la République : 1848-1852*, nouvelle éd., Paris, Seuil, 1992.
- Agulhon, Maurice, *Les Quarante-huitards*, Paris, Gallimard, 1992.
- Aminzade, Ronald, *Ballots and Barricades: Class Formation and Republican Politics in France, 1830-1871*, Princeton, Princeton University Press, 1993.
- Anonyme, *Des avantages de la mendicité bien réglée dans l'économie sociale, des inconvénients de sa suppression absolue, et de la nécessité de réformer la législation à cet égard*, Paris, 1816.
- Anonyme, *La République démocratique et sociale. Exposition des principes socialistes et de leur application immédiate en France*, 2^e éd., Paris, 1849.
- Archives du christianisme*, t. 6, 1828.
- Azouvi, François et Bourel, Dominique, *De Königsberg à Paris : la réception de Kant en France (1788-1804)*, Paris, Vrin, 1991.
- Badinter, Robert, *La prison républicaine (1871-1914)*, Paris, Fayard, 1992.
- Baal, Gérard, *Histoire du radicalisme*, Paris, La Découverte, 1994.
- Badel, Maryse, *Le droit social à l'épreuve du Revenu minimum d'insertion*, Bordeaux, Presses Universitaires de Bordeaux, 1996.
- Baker, Keith Michael, *Condorcet : From Natural Philosophy to Social Mathematics*, Chicago and London, University of Chicago Press, 1975.
- Baker, Keith Michael ed., *The French Revolution and the Creation of Modern Political Culture*, v. 1, *The Political Culture of the Old Regime*, Oxford and New York, Pergamon Press, 1987.
- Barbet, Auguste, *Mélanges d'économie sociale*, Rouen, 1832.
- Barni, Jules, *Philosophie de Kant : examen de la critique du jugement*, Paris, 1850.
- Barni, Jules, *Philosophie de Kant : examen des fondements de la métaphysique des mœurs et de la critique de la raison pratique*, Paris, 1851.
- Barni, Jules, *La morale dans la démocratie*, Paris, 1868, reproduit chez Kimé, 1992.
- Barni, Jules, *Manuel républicain*, 1872, repris dans *La morale dans la démocratie*, Paris, Kimé, 1992.
- Barral, Pierre, *Les fondateurs de la Troisième République*, Paris, Armand Colin, 1968.
- Bartier, John ed., *1848, les utopies sociales : utopie et action à la veille des journées de Février*, Paris, C.D.U. et SEDES réunis, 1981.
- Bastid, Paul, *Sieyès et sa pensée*, Paris, Hachette, 1939.
- Baudeau, abbé, *Ephémérides du Citoyen, ou Bibliothèque raisonnée des « Sciences morales et politiques »*, 1767.
- Bec, Colette, *Assistance et République : la recherche d'un nouveau contrat social sous la Troisième République*, Paris, Editions de l'Atelier, 1994.

- Béchar, Ferdinand, *Essai sur centralisation administrative*, 2 vol, Marseille et Paris, 1836.
- Béchar, Ferdinand, *La commune, l'Église et l'État dans leurs rapports avec les classes laborieuses*, Paris, 1849.
- Bellamy, Richard, *Liberalism and Modern Society : A Historical Argument*, University Park, Pennsylvania State University Press, 1992.
- Bénichou, Paul, *Le temps des prophètes : doctrines de l'âge romantique*, Paris, Gallimard, 1977.
- Bénichou, Paul, *Le sacré de l'écrivain, 1750-1830 : essai sur l'avènement d'un pouvoir spirituel laïque dans la France moderne*, Paris, Gallimard, 1996.
- Berenson, Edward, *Populiste Religion and Left-Wing Politics in France, 1830-1852*, Princeton, Princeton University Press, 1984.
- Berenson, Edward, « A New Religion of the Left : Christianity and Social Radicalism in France, 1815-1848 », in François Furet and Mona Ozouf eds., *The Transformation of Political Culture, 1789-1848*, London, Pergamon Press, 1989, pp. 543-560.
- Bernard, Claude, *Introduction à l'étude de la médecine expérimentale*, 1865 (ズメナーニ ヲローネ (三浦伯崇訳)『実験医学序説』岩波文庫、1921年).
- Bernardini, Jean-Marc, *Le darwinisme social en France (1859-1918) : fascination et rejet d'une idéologie*, Paris, CNRS, 1997.
- Berstein, Serge, *Histoire du Parti Radical*, t. 1, *la recherche de l'âge d'or, 1919-1926*, Paris, Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, 1980.
- Berstein, Serge, dir., *Les cultures politiques en France*, Paris, Seuil, 1999.
- Billard, Jacques, *De l'école à la République : Guizot et Victor Cousin*, Paris, Presses Universitaires de France, 1998.
- Blanqui, Adolphe, *Des classes ouvrières en France pendant l'année 1848*, Paris, 1849.
- Blanc, Louis, *Organisation du travail*, Paris, 1840.
- Blanc, Louis, *La république une et indivisible*, Paris, 1851.
- Blanc, Louis, *Plus de Girondins*, Paris, 1851.
- Blais, Marie-Claude, *Au principe de la République: Le cas Renouvier*, Paris, Gallimard, 2000.
- Bonald, « De la richesse des Nations », 23 décembre 1810, *Gazette de France*, dans *Mélanges littéraires, politiques et philosophiques*, t. 2, *Œuvres complètes*, vol. 11, Paris, Slatkin, 1982, pp. 346-364.
- Bonald, « De l'industrie et du paupérisme », *Gazette de France*, 26 juin et 6 sep. 1837.
- Borgetto, Michel, *La notion de fraternité en droit public français*, Paris, Librairie générale de droit et de jurisprudence, 1993.

- Borgetto, Michel, *La devise « liberté, égalité, fraternité »*, Paris, Presses Universitaires de France, 1997.
- Borgetto, Michel et Lafore, Robert, *La république sociale : contribution à l'étude de la question démocratique en France*, Paris, Presses Universitaires de France, 2000.
- Bouglé, Célestin, *Le solidarisme*, Paris, 1907.
- Bouglé, Célestin, *Proudhon*, Paris, 1930.
- Bourgeois, Léon, *Solidarité*, 1^{re} éd., 1896, reproduit chez Presses Universitaires du Septentrion, Paris, 1998.
- Bourgeois, Léon, *Les applications sociales de la solidarité*, Paris, 1901.
- Bourgeois, Léon, *Essai d'une philosophie de solidarité*, Paris, 1902.
- Bourgeois, Léon, *La mutualité et la lutte contre la tuberculose, conférence faite au Musée social, le 6 Novembre 1905*, Paris, 1906.
- Bourgeois, Léon et Croiset, Alfred, *Essai d'une philosophie de la solidarité*, 2^e éd., Paris, 1907.
- Bourgeois, Léon, *La politique de la prévoyance sociale*, t. 1, *la doctrine et la méthode*, Paris, 1914.
- Branciard, *Société française et luttes de classes, 1789-1914*, Lyon, 1967.
- Braudel et Labrousse, *Histoire économique et sociale de la France*, t. 3, *1789-années 1880 : l'avènement de l'ère industrielle*, Paris, Presses Universitaires de France, 1993.
- Bravo, Gian Mario, *Les socialistes avant Marx*, Paris, Maspero, 1970.
- Breton, Yves et Lutfalla, Michel dir., *L'économie politique en France au 19^e siècle*, Paris, Economica, 1991.
- Breton, Yves, « The Société d'Economie politique of Paris (1842-1914) », Massimo M. Augello and Marco E. L. Guidi ed., *The Spread of Political Economy and the Professionalisation of Economics : Economic societies in Europe, America and Japan in the nineteenth century*, London and New York, Routledge, 2001.
- Buchez et Roux, *Histoire parlementaire de la Révolution française*, 40 vol., Paris, 1834-1838.
- Budin, P., Gide, Ch. et al., *Les applications sociales de la solidarité*, Paris, Félix Alcan, 1904.
- Buisson, Ferdinand, *La politique radicale : étude sur les doctrines du parti radical et radical-socialiste*, Paris, 1908.
- Burchell, Graham, Cordon, Colin and Miller, Peter eds., *The Foucault Effect : Studies in Governmentality*, Chicago, University of Chicago Press, 1991.
- Buret, Eugène, *De la misère des classes laborieuses en Angleterre et en France*, 2 vol. Paris, 1840.

- Cabanis, *Œuvres philosophiques de Cabanis*, 2 vol., Paris, Presses Universitaires de France, 1956.
- Cabet, Etienne, *Voyage en Icarie*, Paris, 1840.
- Carlton, Donald Geoffrey, *Positivist Thought in France. during the Second Empire 1852-1870*, Westport and Connecticut, Greenwood Press, 1976.
- Castel, Robert, *Les métamorphoses de la question sociale : une chronique du salariat*, Paris, Gallilard, 1995.
- Centre universitaire de recherches administratives et politiques de Picardie, *La solidarité : un sentiment républicain ?*, Paris, Presses Universitaires de France, 1992.
- Chambelland, Colette, dir., *Le Musée social en son temps*, Paris, Presses de l'École Normale Supérieure, 1998.
- Chamborant, C. G. de, *Du paupérisme, ce qu'il était dans l'antiquité, ce qu'il est de nos jours*, Paris, 1842.
- Champneuf, Guerry de, *Comptes générales de l'administration de la justice criminelle*, 1827.
- Changy, Hugues Carpentier de, *Le parti légitimiste sous la Monarchie de Juillet (1830-1848)*, Thèse de l'Université de Paris Val-de Marne, 1980.
- Charle, Christophe, *Les élites de la République, 1880-1900*, Paris, Fayard, 1987.
- Charle, Christophe, *Naissance des « intellectuels » (1880-1900)*, Paris, Minuit, 1990.
- Charle, Christophe, *Histoire sociale de la France au 19^e siècle*, Paris, Seuil, 1991.
- Charle, Christophe, *République des universitaires*, Paris, Gallimard, 1994.
- Cherbuliez, *Le socialisme c'est la barbarie : examen des questions sociales qu'a soulevées la Révolution du 24 février 1848*, Paris, 1848.
- Cheysson, Emile, *L'Economie sociale à l'Exposition universelle de 1889. Communication faite au congrès d'économie sociale le 13 juin 1889*, Paris, 1889.
- Cheysson, Emile, « Les assurances ouvrières », *La réforme sociale*, 3^e série, t. 10, 1^{er} octobre 1895, pp. 513-525.
- Cheysson, Emile, « L'évolution des idées et des systèmes de retraite », *La réforme sociale*, 16 février 1902, 5^e série, t. 3 (t. 18 collection).
- Cheysson, Emile, *La solidarité sociale*, extrait de *L'Economiste français*, numéro du 4 juillet, 1903.
- Cheysson, Emile, *Les retraites ouvrières*, Paris, 1905
- Cheysson, Emile, *Emile Cheysson : Œuvres choisies*, 2 vol., Paris, 1911.
- Clark, Terry Nichols, *Prophets and Patrons : the French University and the Emergence of the Social Sciences*, Cambridge and Massachusetts, Harvard University Press, 1973.
- Clarkson, William, *An Inquiry into the Cause of the Increase of Pauperism and Poor Rates*, London, 1816.

- Comte, Auguste, « Plan des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société », *Appendice général du système de politique positif*, Paris, 1822, dans *Œuvres d'Auguste Comte*, t. 10, Paris, Anthropos, 1970 (霧生和夫訳「社会再組織化に必要な科学的作業のプラン」『世界の名著36』中央公論社 一九七〇年 四七―一三九頁).
- Comte, Auguste, « Discours préliminaire sur l'esprit positif », *Traité philosophique d'Astronomie populaire*, 1844, dans *Œuvres d'Auguste Comte*, t. 11, Paris, Anthropos, 1970 (霧生和夫訳「実証精神論」『世界の名著36』中央公論社 一九七〇年 一四一―一三三三頁).
- Comte, Auguste, *Cours de philosophie positive*, 6 vol., 1841-1842.
- Comte, Auguste, *Système de politique positive*, Paris, t. 4, 1854.
- Condorcet, *Œuvres de Condorcet*, 12 vol., Paris, 1847-49.
- Condorcet, *Essai sur l'application de l'analyse à la probabilité des décisions rendues à la pluralité des voix*, 1785.
- Condorcet, *Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain*, 1785, reproduit chez Vrin, Paris, 1970 (渡邊誠訳『人間精神進歩史』岩波文庫 一九五一年).
- Considérant, Victor, *Principes du socialisme : manifeste de la démocratie au 19^e siècle*, Paris, 1847.
- Considérant, Victor, *La législation directe par le peuple*, Paris, 1850.
- Considérant, Victor, *La solution ou le gouvernement direct du peuple*, Paris, 3^e éd, 1851.
- Constant, Benjamin, *De l'esprit de conquête et de l'usurpation dans leurs rapports avec la civilisation européenne*, 1814, reproduit chez Flammarion, Paris, 1986.
- Coquelin, Ch. et Guillaumin dir., *Dictionnaire de l'économie politique*, 2 vol., Paris, 1873.
- Crossly, Ceri, *French Historians and Romanticism : Thierry, Guizot, the Saint-Simoniens, Quinet, Michelet*, London and New York, Routledge, 1993.
- Cuvillier, A., *Un journal d'ouvriers, « L'Atelier » (1840-1850)*, Paris, Éditions ouvrières, 1954.
- Cuvillier, Armand, *Hommes et idéologues de 1840*, Paris, Librairie Marcel Rivière et Cie, 1956.
- David, Marcel, *Le printemps de la Fraternité : genèse et vicissitudes 1830-1851*, Paris, Aubier, 1992.
- David, Marcel, *Fraternité et Révolution française*, Paris, Aubier, 1987.
- David, Marcel, *Les fondements du social : de la 3^e République à l'heure actuelle*, Paris, Anthropos, 1993.
- d'Angeville, Adolphe, *Essai sur la statistique de la population française, considérée sous quelques-uns de ses rapports physiques et moraux*, Paris, 1836.

- de Caux, Charles, *Essai d'économie politique : discours prononcé à l'ouverture d'un cours d'économie politique*, Paris, 1832.
- Donzelot, Jacques, *La police des familles*, Paris, Éditions de Minuit, 1977 (宇波彰試『家族に介入する社会—近代家族と国家の管理基盤』新曜社、一九九一年)。
- Donzelot, Jacques, *L'invention du social : essai sur le déclin des passions politiques*, Paris, Fayard, 1984.
- Donzelot, Jacques, *Face à l'exclusion : le modèle français*, Paris, Editions Esprit, 1991.
- Donzelot, Jacques et Estèbe, Philippe, *L'Etat animateur : essai sur la politique de la ville*, Paris, Editions Esprit, 1994.
- Donzelot, Jacques, « L'avenir du social », *Esprit*, Mars 1996, pp. 58-81.
- Dreyfus, M., Gibaud, B., Gueslin, A. dir., *Démocratie, solidarité et mutualité : autour de la loi de 1898*, Paris, Economica, 1999.
- Dreyfus, Michel, *Liberté, Égalité, Mutualité : mutualisme et syndicalisme, 1852-1967*, Paris, Editions de l'Atelier, 2001.
- Droz, *Histoire générale du socialisme*, t. 1, des origines à 1875, Paris, Presses Universitaires de France, 1997.
- Droz, Jacques, *Histoire des doctrines politiques en France*, Paris, Presses Universitaires de France, 1948.
- Droz, Joseph, *Économie politique ou principe de la science de richesses*, 2^e éd., Paris, 1846.
- Dubois, Pascal, *Le solidarisme*, Thèse de l'Université de Paris, 1985
- Duchâtel, M. T., *Considération d'économie politique sur la bienfaisance ou de la charité*, 2^e éd., Paris, 1836.
- Duchâtel, M. S., *De la Charité, dans ses rapports avec l'état moral et le bien-être des classes inférieures*, Paris, 1829.
- Dufau, P. A., *Traité de statistique, ou Théorie de l'étude des lois d'après lesquelles se développent les faits sociaux : suivi d'un essai de statistique physique et morale de la population française*, Paris, 1840.
- Dunoyer, Charles, *L'industrie et la morale considérées dans leurs rapports avec la liberté*, Paris, 1825.
- Dupin, Charles, *Bien-être et concorde des classes du peuple français*, Paris, 1840.
- Duprat, Catherine, *"Pour l'amour de l'humanité": Le temps des philanthropes, la philanthropie parisienne des Lumières à la monarchie de Juillet*, Paris, C.T.H.S., 1993.
- Duprat, Catherine, *Usage et pratiques de la philanthropie : pauvreté, action sociale et lien social, à Paris au cours du premier 19^e siècle*, 2 vol., Paris, Comité d'histoire de la Sécurité sociale, 1997.
- Durkheim, Émile, *De la division du travail social*, (1^{re} éd., 1893), 2^e éd., Paris, 1902 (田原宣和訳『社会分業論』草木書店、一九七一年)。

- Durkheim, Émile, *Les règles de la méthode sociologique*, Paris, 1919 (1^{re} éd. 1895) (宮島喬訳『自叙論』中公文庫、一九八五年)。
- Durkheim, Émile, *Le suicide : étude de sociologie*, Paris, Presses Universitaires de France, 1930 (1^{re} éd. 1897) (宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波文庫、一九七八年)。
- Durkheim, Émile, *Le socialisme : sa définition, ses débuts, la doctrine saint-simonienne*, Paris, 1928 (森博訳『社会主義およびサン・シモン』恒星社厚生閣、一九七七年)。
- Durkheim, Émile, *La science sociale et l'action*, Paris, Presses Universitaires de France, 1970 (佐々木交賢、中嶋明勲訳『社会科学と行動』恒星社厚生閣、一九八八年)。
- Durkheim, Émile, *Leçons de sociologie*, Paris, Presses Universitaires de France, (1^{re} éd., 1950), 1997 (宮島喬、川喜多喬訳『社会学講義』みすず書房、一九九四年)。
- Durkheim, Émile, « De quelques formes primitives de classification », *Année sociologique*, vol. 3, 1903.
- Emile Durkheim, *Textes*, 3 vol., Paris, Editions de Minuit, 1975.
- Duroselle, Jean-Baptiste, *Les débuts du catholicisme social en France (1822-1870)*, Paris, Presses Universitaires de France, 1951.
- Dutton, Paul V., *Origins of the French Welfare State : the Struggle for Social Reform in France, 1914-1947*, Cambridge, Cambridge University Press, 2002.
- Edwards, Milne et Perrier, Edmond, *Les colonies animales*, Paris, 1881.
- Elwitt, Sanford, *The Third Republic Defended : Bourgeois Reform in France, 1880-1914*, Baton Rouge and London, Louisiana State University Press, 1986.
- Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres, 1777-1779.*
- Epstein, Léon, *L'économie et la morale aux débats du capitalisme industriel en France et en Grand-Bretagne*, Paris, École pratique des hautes études, 6^e section, mémoire 62, 1966.
- Evans, David Owen, *Le socialisme romantique : Pierre Leroux et ses contemporains*, Paris, Marcel Rivière, 1948.
- Ewald, François, *L'Etat-providence*, Paris, Grasset, 1986.
- Faure, Olivier et Dessertine, Dominique, *La maladie entre libéralisme et solidarité (1850-1940)*, Paris, Mutualité française, 1994.
- Fedi, Laurent, *Le problème de la connaissance dans la philosophie de Charles Renouvier*, Paris, Harmattan, 1998.
- Festy, Octave, *Le mouvement ouvrier au début de la monarchie de Juillet, 1830-1834*, Paris, Edouard Cornély, 1908.
- Fix, Théodore, *Observations sur l'état des classes ouvrières*, Paris, 1845.

- Fontana, Biancamariam ed., *The Invention of the Modern Republic*, Cambridge, Cambridge University Press, 1994.
- Forrest, Alan, *The French Revolution and the Poor*, Oxford, Basil Blackwell, 1981.
- Foucault, Michel, *Les mots et les choses. Une archéologie des sciences humaines*, Paris, Gallimard, 1966 (渡辺 佐々木訳『言葉と物—人文科学の考古学』新潮社、一九七四年).
- Foucault, Michel, *Histoire de la folie à l'âge classique*, Paris, Gallimard, 1972 (田村俊訳『狂気の歴史—古典主義の時代における—』新潮社、一九七五年).
- Foucault, Michel, *Surveiller et punir : naissance de la prison*, Paris, Gallimard, 1975 (田村俊訳『監獄の誕生—監視と処罰』新潮社、一九七七年).
- Foucault, Michel, « Sécurité, territoire, population », dans *Annuaire du Collège de France*, 78^e année, 1978, pp. 445-449 (「治安・領土・人口」『ミシェル・フーコー思考集成Ⅳ』筑摩書房、二〇〇〇年、二六四—二六九頁).
- Foucault, Michel, « Naissance de la biopolitique » dans *Annuaire du Collège de France*, 79^e année, 1979, pp. 367-372 (「生体政治の誕生」『ミシェル・フーコー思考集成Ⅳ』筑摩書房、二〇〇一年、一三四—一四二頁).
- Foucault, Michel, « La politique de la santé au 18^e siècle », *Les machine à guérir*, Bruxelles, Pierre Mardaga, 1979, pp. 7-18 (「十八世紀における健康政策」同上、六—一二頁).
- Foucault, Michel, Dits et écrits, 4 vol., Paris, Gallimard, 1994 (通訳 渡辺監修『ミシェル・フーコー思考集成』全一〇巻、筑摩書房、一九九八—二〇〇一年).
- Foucault, Michel, *Naissance de la biopolitique*, Paris, Seuil / Gallimard, 2004.
- Fouillée, Alfred, *La science sociale contemporaine*, Paris, Hachette, 1880.
- Fouillée, Alfred, *La démocratie politique et sociale*, Paris, Félix Alcan, 1910.
- Fouillée, Alfred, *Moral des idées-forces*, 2^e éd., Paris, Félix Alcan, 1908.
- Fourrier, Charles, *Théorie de l'unité universelle*, Paris, 1822.
- Frégier, H. -A., *Des classes dangereuses de la population dans les grandes villes, et des moyens de les rendre meilleurs*, Paris, 1840.
- Furet, François, *Penser la Révolution française*, Paris, Gallimard, 1978 (大津真作訳『フランス革命を考える』岩波書店、一九八九年).
- Furet, François, *La gauche et la révolution au 19^e siècle : Edgar Quinet et la question du jacobinisme, 1865-1870*, Paris, Hachette, 1986.
- Garnier, Joseph, *De l'origine et de la filiation du mot économie politique et des divers autres noms donnés à la science économique*, Paris, 1852.

- Garnier, Joseph éd., *Le droit au travail à l'Assemblée Nationale : recueil complet de tous les discours prononcés dans cette mémorable discussion*, Paris, 1848.
- Gauchet, Marcel, *La révolution du pouvoir*, Paris, Gallilard, (富永茂樹、北垣徹、前川真行訳『代表制の政治哲学』みすず書房、二〇〇〇年)。
- Guépin, Alphonse, *Traité d'économie sociale*, Paris, 1833.
- Gély, Joseph, *Etude générale sur le risque professionnel dans les accidents du travail*, Thèse pour le doctorat de l'Université de Toulouse, Toulouse, 1898.
- Gérando, le baron de Joseph-Marie de, *Le visiteur du pauvre*, 3^e éd., Paris, 1826, reproduit chez Jean-Michel Place, Paris, 1989.
- Gérando, le baron de Joseph-Marie de, *Des progrès de l'industrie dans leurs rapports avec le bien-être physique et moral de la classe ouvrière*, 2^e éd., 1845.
- Gibaud, Bernard, *De la mutualité à la sécurité sociale : conflits et convergences*, Paris, Éditions ouvrières, 1986.
- Gibaud, Beranrd, *Mutualité, assurances (1850-1914) : les enjeux*, Paris, Economica, 1998.
- Gide, Charles, *Quatre écoles d'économie sociale, Conférences faite à Genève, le 28 mars 1890*, 1890.
- Gide, Charles, *Charles Fourier : œuvres choisies*, Paris, 1890.
- Gide, Charles, *Exposition universelle internationale de 1900 à Paris, Rapports du jury international, introduction générale, 6^e partie, économie sociale*, Paris, 1901.
- Gide, Charles, *Economie sociale*, 3^e éd., Paris, 1907.
- Gide, Charles et Riste, Charles, *Histoire des doctrines économiques : depuis les physiocrates jusqu'à nos jours*, 2^e éd., Paris, 1913.
- Gide, Charles, *Fourier : précurseur de la coopération*, Paris, Association pour l'enseignement de la coopération, 1924.
- Gide, Charles, *Cours d'économie politique*, 10^e éd., 2 vol., Paris, 1930-1931.
- Gide, Charles, *La solidarité. Cours au Collège de France, 1927-1928*, Paris, 1932.
- Gigot, Albert, « Les assurances ouvrières et le socialisme d'Etat », *La réforme sociale*, 3^e série, t. 9, 1^{er} juin, 1895, pp. 829-846.
- Girardin, Emile, *L'abolition de l'autorité par la simplification du gouvernement*, Paris, 1850.
- Gouhier, Henri, *La jeunesse d'Auguste Comte et la formation du positivisme*, 3 vol., Paris, Vrin, 1970.
- Grancer, Gilles-Gaston, *La mathématique sociale de Condorcet*, Paris, Presses Universitaires de France, 1956.
- Guépin, Alphonse, *Traité d'économie sociale*, Paris, 1833.

- Guerry, *Essai sur la statistique morale de la France*, Paris, 1833.
- Gueslin, André et Guillaume, Pierre dir., *De la charité médiévale à la sécurité sociale : économie de la protection sociale du Moyen Âge à l'époque contemporaine*, Paris, Editions Ouvrières, 1992.
- Gueslin, André, *L'invention de l'économie sociale : idées, pratiques et imaginaires coopératifs et mutualistes dans la France de 19^e siècle*, nouvelle éd., Paris, Economica, 1998.
- Gueslin, André, *Gens pauvres, pauvres gens dans la France au 19^e siècle*, Paris, Aubier, 1998.
- Guieysse, Paul, *Troisième rapport supplémentaire de M. Guieysse au nom de la commission d'assurance et de prévoyance sociales*, 31 janvier 1902.
- Guirvitch, Georges, *L'idée du droit social : notion et système du Droit Social. Histoire doctrinale depuis le 17^e siècle jusqu'à la fin du 19^e siècle*, Paris, 1932.
- Guizot, François, *Des moyens de gouvernement et d'opposition dans l'état actuel de la France*, 1821, reproduit chez Belin, Paris, 1988.
- Guizot, François, *Histoire de la civilisation en Europe depuis la chute de l'Empire romain jusqu'à la Révolution française*, 1828 (『西洋事情』全11巻、角川文庫、一九五四年).
- Guizot, François, *De la démocratie en France*, Paris, 1849.
- Guyau, Augustin, *La politique et la sociologie d'Alfred Fouillée*, Paris, Félix Alcan, 1913.
- Hahn, Roger, *The Anatomy of a Scientific Institution : The Paris Academy of Sciences, 1666-1803*, Los Angeles, University of California, 1971.
- Hamburger, Maurice, *Léon Bourgeois, 1851-1925*, Paris, Librairie des Sciences Politiques et Sociales, 1932.
- Haroche, Claudine, « La compassion comme amour social et politique de l'autre au 18^e siècle », dans Centre de Recherches Administratives et Politiques de Picarde, *La solidarité : un sentiment républicain ?*, Paris, Presses Universitaires de France, 1992, p. 11-25.
- Hatzfeld, Henri, *Du paupérisme à la sécurité sociale, 1850-1940 : essai sur les origines de la Sécurité Sociale en France*, Nancy, Presses Universitaires de France, 1989.
- Hazareesingh, Sudhir, *From Subject to Citizen : the Second Empire and the Emergence of Modern French Democracy*, Princeton, Princeton University Press, 1998.
- Hazareesingh, Sudhir, *Intellectual Founders of the Republic : Five Studies in Nineteenth-Century French Republican Political Thought*, Oxford, Oxford University Press, 2001.

- Hayward, J. E. S., « Solidarity : The Social History of an Idea in Nineteenth Century France », *International Review of Social History*, no. 4, 1959, pp. 261-284.
- Hayward, J. E. S., « The Official Social Philosophy of the French Third Republic : Léon Bourgeois and Solidarism », *International Review of Social History*, vol. 6, 1961, pp. 19-48.
- Hayward, J. E. S., « Educational Pressure Groups and the Indoctrination of the Radical Ideology of Solidarism », *International Review of Social History*, vol. 8, 1963, pp. 1-17.
- Himmelfarb, Gertude, *The Idea of Poverty : England in the Early Industrial Age*, New York, Alfred A. Knope, 1984.
- Holmes, Stephen, *Benjamin Constant and the Making of Modern Liberalism*, New Haven, Yale University Press, 1984.
- Horne, Janet, « Le Musée social à l'origine : les métamorphoses d'une idée », *Le mouvement social*, avril-juin, 1995, pp. 47-69.
- Horne, Janet, « Le libéralisme à l'épreuve de l'industrialisation : la réponse du Musée social » dans Colette Chambelland dir., *Le musée social en son temps*, Paris, Presses de l'Ecole Normale Supérieure, 1998, pp. 13-25.
- Horne, Janet, R., *A Social Laboratory for Modern France : The Musée social and the Rise of the Welfare State*, Durham and London, Duke University Press, 2002 (trad. fr. : *Le musée social : aux origines de l'Etat providence*, Paris, Belin, 2004).
- Hunt, H. -J., *Le socialisme et le romantisme en France : étude de la presse socialiste de 1830 à 1848*, Oxford, Clarendon Press, 1935.
- Isambert, Gaston, *Les idées socialistes en France de 1815 à 1848 : le socialisme fondé sur la fraternité et l'union des classes*, Paris, 1905.
- Izoulet, Jean, *La cité moderne*, Paris, 1894.
- Jaume, Lucian, *L'individu effacé, ou le paradoxe du libéralisme français*, Paris, Fayard, 1997.
- Juillard, Jacques, *La faute à Rousseau : essai sur les conséquences historiques de l'idée de souveraineté populaire*, Paris, Seuil, 1985.
- Kalora, B. et Savoye A., *Les inventeurs oubliés. Le Play et ses continuateurs aux origines des sciences sociales*, Seyssel, Éditions du Champ-Valon, 1989.
- Kayser, Jacques, *Les grandes batailles du radicalisme des origines aux portes du pouvoir 1820-1901*, Paris, Rivière et Cie, 1961.
- Kelly, Michael, *Hegel in France*, Birmingham, Birmingham Modern Languages Publications, 1992.
- Keslassy, Eric, *Le libéralisme de Tocqueville à l'épreuve du paupérisme*, Paris, Harmattan, 2000.
- Kitagaki, Toru, « Alfred Fouillée et l'idéal républicain », *Zinbun (Kyoto University)*, t. 31, 1993, pp. 83-134.
- Laberthonnière, Lucian, *Critique du laïcisme, ou Comment se pose le problème de Dieu*, Paris, Vrin, 1948.

- la Borde, Alexandre, *De l'esprit d'association dans tous les intérêts de la communauté*, 3^e éd., Paris, 1834.
- Lallemand, Léon, *La Révolution et les pauvres*, Paris, 1898.
- Lallier, F., « D'une nouvelle école d'économie politique », *Revue européenne*, t. 1, pp. 129-148, t. 2, pp. 247-283, 1835.
- Lamartine, *Histoire de la Révolution de 1848*, Paris, 1848.
- Lamberti, Jean-Claude, *Tocqueville et les deux démocraties*, Paris, Presses Universitaires de France, 1983.
- Lamennais, Félicité, *De l'esclavage moderne*, 4^e éd., Paris, 1840.
- Lamennais, Félicité, *Livre du peuple*, Paris, 1837 (田邊武之助訳『民衆の書』創元社、一九四九年).
- La Rochefoucauld-Liancourt, *Premier rapport du comité de mendicité, exposé des principes généraux qui ont dirigé son travail*, Paris, 1790.
- La Rochefoucauld-Liancourt, *Quatrième rapport du comité de mendicité, Secours à donner à la classe indigente dans les différents âges et dans les différentes circonstances de la vie*, 1790.
- La Rochefoucauld-Liancourt, *Septième rapport du comité de mendicité, exposé des principes généraux qui ont dirigé son travail*, Paris, 1790.
- Laurent, Emile, *Le paupérisme et les associations de prévoyance : nouvelles études sur les sociétés de secours mutuels, histoire - économie politique - administrations*, Paris, 2 vol., 1865.
- Lavissee, E., « Une école d'enseignement socialiste révolutionnaire », *Journal des débats*, 17 novembre 1893.
- Lavoisier, *De la richesse territoriale du royaume de France*, 1791.
- Le Van-Lemesle, « Les économistes libéraux et la Révolution française », dans Actes du Colloque International de Vizille (6-8 septembre 1989), *La pensée économique pendant la Révolution française*, Grenoble, Presses Universitaires de Grenoble, 1990.
- Le Bras-Chopard, Armelle, *De l'égalité dans la différence : le socialisme de Pierre Leroux*, Paris, Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, 1986.
- Le Bras-Chopard, Armelle, « Métamorphose d'une notion : la solidarité chez Pierre Leroux », dans Centre de Recherches Administratives et Politiques de Picarde, *La Solidarité : un sentiment républicain ?*, Paris, Presses Universitaires de France, 1992, pp. 55-69.
- Lechevalier, Jules, *Question sociale : de la réforme industrielle, considérée comme problème fondamental de la politique positive*, Paris, 1833.
- Lecuyer, Bernard-Pierre, « Médecins et observateurs sociaux : les Annales d'hygiène publique et de médecine légale (1820-1850) » dans *Pour une histoire de la statistique*, Paris, INSEE, 1977, rééd. Economica, 1987.

- Ledru-Rollin, « Du gouvernement direct par le peuple », « Plus de président, plus de représentants », dans *La voix du proscrit*, Paris, 1848.
- Ledru-Rollin, *Discours politiques et écrits divers*, 2 vol., Paris, 1879.
- Lefevre, Georges, *Quatre-vingt-neuf*, Paris, 1939 (高橋幸八郎は訳『一七八九年—フランス革命序論』岩波書店、一九七五年)。
- Lefranc, Jean, *La philosophie en France au 19^e siècle*, Paris, Presses Universitaires de France, 1998.
- Léon XIII, Pape, « De la condition des ouvriers : à tous nos vénérables frères les patriarches, primats, archevêques et évêques du monde catholique en grace et communion avec le siècle apostolique », *Etudes religieuses, philosophiques, historiques et littéraires : revue mensuelle*, no. 53, 1890, pp. 177-237.
- Le Play, Frédéric, *La méthode sociale*, abrégé des *Ouvriers européens*, Paris, Méridiens Klincksieck, 1989.
- Le Play Frédéric, *La réforme sociale en France. Dédûit de l'observation comparée des peuples européens*, 2 vol., 1864.
- Le Play Frédéric, *L'organisation de la famille selon le vrai modèle*, Paris, 5^e éd, 1895.
- Leroux, Pierre, « De l'individualisme et du socialisme », 1833, repris dans *Aux philosophes, aux artistes, aux politiques : trois discours et autres textes*, Paris, Payot et Rivages, 1994, pp. 235-255.
- Leroux, Pierre, « De l'économie politique anglaise », dans *Aux philosophies, aux artistes, aux politiques : trois discours et autres textes*, Paris, Payot et Rivages, 1994 (article paru dans *Le National* en 1834) pp. 257-267.
- Leroux, Pierre, *De l'humanité*, 1840, reproduit chez Fayard, Paris, 1985.
- Leroux, Pierre, *Réfutation de l'éclectisme*, Paris et Genève, Slatkin, 1979.
- Leroy-Beaulieu, Paul, *L'Etat moderne et ses fonctions*, 3^e éd., Paris, 1900.
- Leroy, Maxime, *Histoire des idées sociales en France*, t. 2, de Babeuf à Tocqueville, Paris, Gallimard, 1950.
- Leroy, Maxime, *Histoire des idées sociales en France*, t. 3, d'Auguste Comte à P.-J. Proudhon, Paris, Gallimard, 1954.
- Les révolutions du 19^e siècle. 1848 : La révolution démocratique et sociale*, 10 vol., Paris, EDHIS, 1984.
- Leterrier, Sophie-Anne, *L'institution des sciences morales (1795-1850)*, Paris, Harmattan, 1995.
- Liard, Louis, *La science positive et la métaphysique*, Paris, 1879.
- Logue, William, *From Philosophy to Sociology*, DeKalb, Illinois, Northern Illinois University Press, 1983.
- Logue, William, *Charles Renouvier : Philosopher of Liberty*, Baton Rouge and London, Louisiana State University Press, 1992.

- Lukes, Stiven, *Émile Durkheim, His Life and Work : A Historical and Critical Study*, London and New York, Penguin Books, 1975.
- Lynch, Katherine A., *Family, Class and Ideology in Early Industrial France : Social Policy and the Working-Class Family, 1825-1848*, The University of Wisconsin Press, 1988.
- Maistre, de, « De la richesse des Nations » du 23 décembre, 1810, dans *Mélanges littéraires, politiques et philosophiques*, t. 2, *Œuvres complètes*, vol. 11, Paris, Slatkin, 1982, pp. 346-364.
- Manent, Pierre, *Histoire intellectuelle du libéralisme : dix leçons*, Paris, Calmann-Lévy, 1987.
- Marbeau, J.-B.-F., *Politique des intérêts, ou Essai sur les moyens d'améliorer le sort des travailleurs sans nuire aux propriétaires*, Paris, 1834.
- Marco, Luc dir., *Les revues d'économie en France (1751-1994)*, Paris, Harmattan, 1996.
- Marion, Henri, *De la solidarité morale : essai de psychologie appliquée*, 6^e éd., Paris, 1907.
- Mathiez, Albert, *La Révolution française*, 1922. (『ぼくもろ』 世界史大説『フランス大革命』全三巻 岩波書店 一九五八—一九五九年)。
- Mauranges, G., *Sur l'histoire de l'idée de solidarité*, Thèse de Université de Paris, Faculté de droit, Paris, A. Michalon, 1909.
- Maze, Hyppolyte, *La lutte contre la misère*, Paris, 1883.
- Michel, Henry, *L'idée de l'État : essai critique sur l'histoire des théories sociales et politiques en France depuis la Révolution*, Paris, Hachette, 1896.
- Michel, Pierre, *Un myth romantique : les barbares, 1789-1848*, Lyon, Presses Universitaires de Lyon, 1981.
- Mignet, François, *Histoire de la Révolution française depuis 1789 jusqu'en 1814*, Paris, 1824.
- Milhaut, Gaston, *La philosophie de Charles Renouvier*, Paris, Vrin, 1927.
- Milne-Edwards et Perrier, Edmond, *Les colonies animales*, Paris, 1881.
- Morogues, Bon Bigot de, *Du paupérisme, de la mendicité et des moyens d'en prévenir les funestes effets*, Paris, 1834.
- Mucchielli, Laurent dir., *Histoire de la criminologie française*, Paris, Harmattan, 1994.
- Mucchielli, Laurent, *La découverte du social : naissance de la sociologie en France*, Paris, Editions la Découverte, 1998.
- Murard, Lion et Zylberman, Patrick, *L'hygiène dans la République : la santé publique en France, ou L'utopie contrariée, 1870-1918*, Paris, Fayard, 1996.
- Napoléon, Louis-Bonaparte, *L'extinction du paupérisme*, Paris, 1840.
- Napoléon, Louis-Bonaparte, *Œuvres Napoléon III*, 2 vol., Paris, 1854.
- Naville, François Marc Louis, *De la charité legale, de ses effets, de ses causes, et spécialement des maisons de travail, et de la proscription de la mendicité*,

2 vol., Paris, 1836.

Necker, « Sur la législation et le commerce des grains », 1848, dans *Collections des principaux économistes*, t. 15, *Mélanges d'économie politique*, v. 2, 1848, nouvelle ed., Osnabrück, Otto Zeller, 1966.

Nicolet, Claude, *Le radicalisme*, Paris, Presses Universitaires de France, 1974（白井はか訳『フランクスの急進主義－大革命精神の系譜』白水社、一九七五年）。

Nicolet, Claude, *L'idée républicaine en France (1789-1924) : essai d'histoire critique*, Paris, Gallimard, 1994.

Nicolet, Claude, « Jules Ferry et la tradition positiviste », *Jules Ferry : fondateur de la République*, Paris, Editions de l'Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, 1985.

Nisbet, Robert, *The Sociology of Emile Durkheim*, New York, Oxford University Press, 1974.

Nique, Christian, *François Guizot : l'école au service du gouvernement des esprits*, Paris, Hachette, 1999.

Nora, Pierre dir., *Les lieux de mémoire*, 7 vol., Paris, Gallimard, 1984-1992（抄訳、谷川裕監修『記憶の場』全三巻、岩波書店、二〇〇二～二〇〇三）。

Nord, Philip, "The Welfare State in France, 1870-1914", *French Historical Studies*, vol. 18, no. 3, Spring 1994, pp. 821-838.

Nord, Philip, *The Republican Moment : Struggles for Democracy in Nineteenth-Century France*, Cambridge, Harvard University Press, 1998.

Ozouf, Mona, *La fête révolutionnaire*, Paris, Gallimard, 1976.

Ozouf, Mona, *L'homme régénéré : essai sur la Révolution française*, Paris, Gallimard, 1989.

Ozouf, Mona, « Liberté, égalité, fraternité », dans Pierre Nora dir., *Les lieux de mémoire*, vol. 3, *Les France*, t. 3, *de l'archive à l'emblème*, Paris, Gallimard, 1992, pp. 582-629.

Palier, Bruno, *Gouverner la sécurité sociale : les réformes du système français de protection sociale depuis 1945*, Paris, Presses Universitaires de France, 2002.

Parent-Duchâtelet, *De la prostitution dans la ville de Paris, considérée sous le rapport de l'hygiène publique, de la morale et de l'administration*, Paris, 1836.

Paugam, Serge, *L'Exclusion : l'état des savoirs*, Paris, Découverte, 1996.

Pecqueur, Constantin, *L'Économie sociale. Des intérêts du commerce de l'industrie et de l'agriculture, et de la civilisation en générale, sous l'influence des*

applications de la vapeur, Paris, 1839.

Pedersen, Susan, *Family, Dependence, and the Origins of the Welfare State : Britain and France, 1914-1945*, Cambridge, Cambridge University Press, 1993.

Perrot, Jean-Claude, *Une histoire intellectuelle de l'économie politique, 17^e-18^e siècle*, Paris, EHESS, 1992.

Perrot, Michelle, *Enquêtes sur la condition ouvrière en France au 19^e siècle*, Paris, Hachette, 1972.

Perrot, Michel, réunis, *L'impossible prison : recherches sur le système pénitentiaire au 19^e siècle*, Paris, Seuil, 1980.

Perrot, Michel, « Premier mesures des faits sociaux : les débuts de la statistique criminelle en France (1789-1830) », dans *Pour une histoire de la statistique*, Paris, INSEE, 1977, rééd. Economica, 1987.

Picavet, François, *Les idéologues : essai sur l'histoire des idées et des théories scientifiques, philosophiques, religieuses, etc. en France depuis 1789*, Paris, Félix Alcan, 1891.

Pierrard, Pierre, *L'Eglise et les ouvriers en France (1840-1940)*, Paris, Hachette, 1984.

Pilbeam, Pamela, « Republicanism in Early Nineteenth-century France, 1814-1835 », *French History*, vol. 5, no. 1, march 1991, pp. 30-47.

Pilbeam, Pamela, *Republicanism in Nineteenth-Century France, 1814-1871*, London, Macmilan, 1995.

Ponteil, Félix, *Histoire de l'enseignement en France : Les grandes étapes 1789-1964*, Paris, Sirey, 1966.

Poynter, J. R., *Society and Pauperism : English Ideas on Poor Relief, 1795-1834*, Routledge and Kegan Paul, London, 1969.

Poyer, Georges, *Cabanis : Choix de textes et introduction*, Paris, Louis-Michaud.

Prévost-Paradol, *La France nouvelle*, Paris, 1868.

Procacci, Giovanna, *Gouverner la misère : la question sociale en France (1789-1848)*, Paris, Seuil, 1993.

Proudhon, Joseph, *Qu'est-ce que la propriété*, Paris, 1840.

Proudhon, Joseph, *Œuvres complètes, Pierre-Joseph Proudhon*, nouvelle éd., 15 vol. Genève, Slatkin, 1982.

Quetelet, *Physique sociale, ou Essai sur le développement des facultés de l'homme*, 2 vol., Bruxelles (1^{re} éd. 1835), 1869 (半' 山根説『人間に就いて』
全三冊' 近世書店' 一九三三(年)).

Radelet, Michel, *Mutualisme et syndicalisme : ruptures et convergences de l'Ancien Régime à nos jours*, Paris, Presses Universitaires de France, 1991.

Ravaisson, Félix, « La philosophie en France au XIX^e siècle », dans *Recueil de rapports sur les progrès des sciences et des lettres*, Paris, 1867, pp. 103-111.

- La Réforme sociale et le centenaire de la Révolution : travaux du congrès tenu en 1889 par la Société d'économie sociale et les unions de la Paix sociale*, Paris, 1890.
- Renaud, Hippolyte, *Solidarité : vue synthétique sur la doctrine de Ch. Fourier*, Paris, 1845.
- Renouvier, Charles, *Manuel républicain de l'homme et du citoyen*, Paris, 1848, rééd. par M. Agulhon, Paris, Garnier, 1981.
- Renouvier, Charles et Fauvety, Ch., *Du gouvernement direct*, Paris, 1851.
- Renouvier, Charles, *Essais de critique générale. Premier essai : analyse générale de la connaissance, plus un appendice sur les principes généraux de la logique et des mathématiques*, Paris, 1854 ; *Deuxième essai : L'homme, la raison, la passion, la liberté, la certitude, la probabilité morale*, Paris, 1859 ; *Troisième essai : Les principes de la nature*, Paris, 1864 ; *Quatrième essai : Introduction à la philosophie analytique de l'histoire*, Paris, 1869.
- Renouvier, Charles, *Science de la morale*, 2 vol., Paris, 1869.
- Renouvier, Charles, « La doctrine républicaine, ou ce que nous sommes, ce que nous voulons », dans *Critique philosophique*, le 8 août 1872, p. 1-16.
- Renouvier, Charles, *Le personnalisme, suivi d'une étude sur la perception externe et sur la force*, Paris, 1903.
- Ring, Sister M. -I., *Villeneuve-Bargemont, precursor of Modern Social Catholicism*, 1935.
- Robert, « Du caractère de la démocratie moderne », *La démocratie, revue mensuelle, repris dans Les révolutions du 19^e siècle*, t. 4, *La propagande socialiste de 1835 à 1848*, Paris, EDHIS, 1979.
- Robinet, *Dictionnaire universel des sciences morales, économiques, politiques et diplomatiques*, 1773-1783.
- Rosanvallon, Pierre, « Pour une histoire conceptuelle du politique », *Revue de synthèse*, vol. 4, no. 1-2, 1981, p. 93-105.
- Rosanvallon, Pierre, *Le moment Guizot*, Paris, Gallimard, 1985.
- Rosanvallon, Pierre, *L'État en France de 1789 à nos jours*, Paris, Gallimard, 1990.
- Rosanvallon, Pierre, *Le sacre du citoyen : Histoire du suffrage universel en France*, Paris, Gallimard, 1992.
- Rosanvallon, Pierre, *La nouvelle question sociale : Repenser l'État-providence*, Paris, Seuil, 1995.
- Rosanvallon, Pierre, *Peuple introuvable : Histoire de la représentation démocratique en France*, Paris, Gallimard, 1998.
- Rosanvallon, Pierre, *La démocratie inachevée : histoire de la souveraineté du peuple en France*, Paris, Gallimard, 2000.
- Rousseau, Jean-Jacques, *Œuvres complètes, Jean-Jacques Rousseau*, Bibliothèque de la pléiade, 5 vol., Paris, Gallimard, 1959-.

- Rudelle, Odile, *La République absolue : aux origines de l'instabilité constitutionnelle de la France républicaine 1870-1889*, Paris, Publications de la Sorbonne, 1982.
- Rumillat, Christiane, *Le solidarisme au 19^e siècle : recherche d'une politique positive*, Thèse de l'Université des Sciences Sociales de Grenoble, 1986.
- Saint-just, *L'esprit de la révolution, suivi de fragments sur les institutions républicaines*, Paris, Editions 10/18, 2003.
- Salmon, Armand, *La mutualité et les assurances sociales*, Paris, 1926.
- Sassier, Philippe, *Du bon usage des pauvres : histoire d'un thème politique (16^e-20^e siècle)*, Paris, Fayard, 1990.
- Sauriac, Xavier, *Réforme sociale, ou cathéchisme du prolétaire*, 1834.
- Say, Jean-Baptiste, *Cours complet d'économie politique pratique*, 1843, reproduit chez Bizzarri, Roma, 1968.
- Say, Jean-Baptiste, *Traité d'économie politique, ou simple exposition de la manière dont se forment, se distribuent et se consomment les richesses*, 6^e éd., Paris, 1841 (1^{re} éd. 1803), reproduit chez Slatkine, Paris, 1982.
- Scott, John A., *Republican Ideas and the Liberal Tradition in France : 1870-1914*, New York, Columbia University Press, 1951
- Sewell, William H., *Gens de métier et révolutions : le langage du travail de l'ancien régime à 1848*, Paris, Aubier Montaigne, 1983.
- Sièyes, *Qu'est-ce que le tier état ?*, Paris, 1789 (大正識記『第三階級とは何か他』岩波文庫'一九五〇年)。
- Sieyès, *Préliminaire de la Constitution : reconnaissance et exposition raisonnée des droits de l'homme et du citoyen*, Paris, 1789.
- Sismondi, Simonde de, *Nouveaux principes d'économie politique, ou De la richesse dans ses rapports avec la population*, Paris, 1819.
- Sismondi, Simonde de, « Avertissement de la seconde édition », Sismondi, *Nouveaux principes d'économie politique*, Paris, Calmann-Lévy, 1977.
- Smith, Adam, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1789 (大正四 | 明識記『國富論』中公文庫'一九七八年)。
- Smith, Timothy B., *Creating the Welfare State in France, 1880-1940*, Montreal and Kingston, McGill-Queen's University Press, 2003.
- Soboul, Albert, *La Révolution française : 1789-1799*, Paris, Editions sociales, 1948.
- Spitzer, Alan B., *The French Generation of 1820*, Princeton, Princeton University Press, 1987.
- Statistique générale de la France*, 1827.
- Stewart, Mary Lynn, *Women, Work and the French State : Labour Protection and Social Patriarchy, 1879-1919*, Kingston, McGill-Queen's University Press, 1989.
- Stone, Judith F., *The Search for Social Peace : Reform Legislation in France, 1890-1914*, Albany and New York, State University of New York Press,

1985.

Système de fraternité, extraits du Populaire, Paris, 1849.

Taine, Hippolyte, *Les philosophies classiques du 19^e siècle en France*, Genève, Slatkin, 1979.

Tanaka, Takuji, « La question sociale et la politique : une origine philosophique de l'Etat social dans les années 1830 en France (1)(2 et fin) », *Hokkaido Law Review*, vol. 52, no. 4, pp. 327-382, no. 6, pp. 219-268, 2001-2002.

Tchernoff, J., *Le parti républicain sous la monarchie de Juillet*, Paris, 1901.

Tchernoff, J., *Le parti républicain au coup d'Etat et sous le Second Empire*, Paris, 1906.

Théry, Adolphe, *Un précurseur du catholicisme social, le vicomte de Villeneuve-Bargemont*, Paris-Lille, Taffin-Lefort, 1911.

Thierry, Augustin, *Histoire de la conquête de l'Angleterre*, Paris, 1826

Thiers, Adolphe, *Histoire de la Révolution française*, 10 vol., Paris, 1823-27.

Thiers, Adolphe, *Rapport général présenté par M. Thiers au nom de la Commission de l'assistance et de la prévoyance publiques*, Paris, 1850.

Thomazeau, Anne-Marie, *Le pari solidaire : histoire de la mutuaoté*, Lontreul, Viva éditions, 1998.

Thompson, David, *Democracy in France : The Third Republic*, London and New York, Oxford University Press, 1946.

Thompson, Edward Palmer, *The Making of the English Working Class*, London, Victor Gollancz, 1963 (市橋 芳賀訳『イギリス労働者階級の誕生』豊田社 1100111年).

Tiano, André, *Alban de Villeneuve-Bargemont (1784-1850) : le précurseur de l'Etat social ou un grand notable bien ordinaire ?*, Nîmes, C. Lacour, 1911.

Tocqueville, Alexis de, *Démocratie en Amérique*, 1831-1835, dans *Œuvre, papiers et correspondances*, 3^e éd., t. 1, Paris, Gallimard, 1951 (抄訳 岩永 松本訳『アメリカにおける民主主義』研究社出版 1971年).

Tocqueville, Alexis de, *Œuvres complètes*, 18 val., Paris, Gallimard, 1958-83.

Tocqueville, Alexis de, *Mémoire sur le paupérisme*, 1835, repris dans *Sur le paupérisme*, Paris, Allia, 1999.

Topalov, Christian dir., *Laboratoires du nouveau siècle : la nébuleuse réformatrice et ses réseaux en France, 1880-1914*, Paris, École des Hautes Études en Sciences Sociales, 1999.

Tracy, Destutt de, *Éléments d'idéologie*, 4 vol., Paris, 1815.

Toucas-Truyen, Patricia, *Histoire de la mutualité et des assurances : l'actualité d'un choix*, Paris, Editions la Découverte et Syros, 1998.

- Turgot, *Œuvres de Turgot*, t. 2, 1844, reproduit chez Osnabrück, Otto Zeller, 1966.
- Tudesq, André Jean, *Les grands notables en France (1840-1849)*, Paris, Presses Universitaires de France, 1965.
- Tudesq, André Jean, « La décentralisation et la droite en France au 19^e siècle », dans *La Décentralisation, 4^e colloque d'histoire organisé par la faculté des Lettres et des Sciences humaines d'Aix-en-Provence, les 1^{er} et 2nd décembre 1961*, Publications des Annales de la Faculté des Lettres Aix-en-Provence, 1964, pp. 55-71.
- Vacherot, Etienne, *La métaphysique et la science, ou principes de métaphysique positive*, 3 vol., Paris, 1858.
- Vacherot, Etienne, *La démocratie*, Paris, 1860.
- Vallois, M., *La formation de l'influence kantienne en France*, Paris, Félix Alcan, 1924.
- Vigarello, Georges, *Le sain et le malsain : santé et mieux-être depuis le moyen âge*, Paris, Seuil, 1993.
- Villeneuve-Bargemont, Alban de, *Economie politique chrétienne*, 2^e ed., Paris, 1837.
- Villeneuve-Bargemont, Alban de, *Discours prononcé à la chambre des députés par M. le Comte Alban de Villeneuve-Bargemont, dans la discussion du projet de loi sur le travail des enfans dans les manufactures*, 1840.
- Villermé, Louis-René, *Tableau de l'état physique et moral des ouvriers employé dans les manufactures de coton, de laine et de soie, Etudes et documentation inter-nationales*, Paris, 1989.
- Vizioz, Henri, *La notion de quasi-contrat : étude historique et critique*, Bordeaux, 1912.
- Warshaw, Dan, *Paul Leroy-Beaulieu and Established Liberalism in France*, Dekalb, Northern Illinois University, 1991.
- Weill, Georges, *Histoire du parti républicain en France de 1815 à 1870*, Paris, 1900.
- Weill, Georges, *Histoire du mouvement social en France (1852-1924)*, Paris, 1924.

四 邦語文獻 (翻訳、著書、論文)

- 赤司道和『十九世紀パリ社会史―家族・労働・文化』北海道大学図書刊行会、二〇〇四年。
- アレント、ハンナ (志水速雄訳)『人間の条件』ちくま学芸文庫、一九九四年。
- アレント、ハンナ (志水速雄訳)『革命について』ちくま学芸文庫、一九九五年。

安藤降穂編著『フランス革命と公共性』名古屋大学出版会、二〇〇三年。

バーザン、ジャック(野島秀勝訳)『ダーウィン、マルクス、ヴァーグナー―知的遺産の批判』法政大学出版局、一九九九年。

バザール他(野地洋行訳)『サン・シモン主義宣言―サン・シモンの学説、解義』第一年度、一八二八―一八二九。木鐸社、一九八二年。

カスー、ジャン(野沢協監訳)『一八四八年―二月革命の系譜』法政大学出版局、一九七九年。

シャルレティエ、セバステイアン(沢崎・小杉訳)『サン・シモン主義の歴史一八二五―一八六四』法政大学出版局、一九八六年。

シャルティエ、ロジェ(松浦義弘訳)『フランス革命の文化的起源』岩波書店、一九九九年。

シュヴァリエ、ルイ(喜安他訳)『労働階級と危険な階級』みすず書房、一九九三年。

コンドルセ他(坂上孝編訳)『フランス革命期の公教育論』岩波文庫、二〇〇二年。

ドラテ、ロベール『ルソーとその時代の政治学』九州大学出版会、一九八六年。

デュルケーム、エミール(内藤莞爾監訳)『デュルケーム法社会学論集』恒星社厚生閣、一九九〇年。

デュロゼル、ジャン・バティスト『カトリックの歴史』白水社、一九六七年。

エスピノーアンデルセン(岡沢憲美、宮本太郎監訳)『福祉資本主義の三つの世界―比較福祉国家の理論と動態』ミネルヴァ書房、二〇〇一年。

年。

福井憲彦『労働の社会史へ』『新しい歴史学』とは何か』日本エディタースクール出版部、一九八七年、二〇一―二三四頁。

フュレ、フランソワ、モナ・オズーフ編(河野他訳)『フランス革命事典』みすず書房、一九九五年。

ハーバーマス、ユルゲン(細谷・山田訳)『公共性の構造転換―市民社会の一カテゴリーについての探求』第二版、未来社、一九九四年。

ハッキング、イワン(石原・重田訳)『偶然を飼いならす―統計学と第二次科学革命』木鐸社、一九九九年。

原輝史『フランス資本主義―成立と展開』日本経済評論社、一九八六年。

ハント、リン(松浦義弘訳)『フランス革命の政治文化』平凡社、一九八九年。

ハント、リン(西川長夫ほか訳)『フランス革命と家族ロマンス』平凡社、一九九九年。

廣澤孝之『フランス「福祉国家」体制の形成』法律文化社、二〇〇五年。

廣田明『フランス・レジオナリスムの成立―ル・ブレイ学派における家族、労働、地域―』遠藤輝明編『地域と国家―フランス・レジオナリスムの研究』日本経済評論社、一九九二年、四九―一〇一頁。

市野川容孝『社会的なものの概念と生命―福祉国家と優生学』『思想』、九〇八号、二〇〇二年、三四―六四頁。

市野川容孝『社会科学』としての医学(上)(下)——一八四八年のR. ヴィルヒョウによせて『思想』、九二六号、一九六一二三四頁、九二七号、一一六一四二頁、二〇〇一年。

岩本吉弘『シャルル・デュノワイエと「二つの産業主義」——王政復古期フランスにおける産業主義と自由主義』『一橋論叢』第二一七卷第二号、一九九七年、二五八―二七六頁、第一一八卷、第二号、一九九八年、二七一―二八五頁。

カント『啓蒙とは何か他』岩波文庫、一九五〇年。

カント(宇都宮芳明訳)『永遠平和のために』岩波文庫、一九八五年。

木崎喜代治『フランス政治経済学の生成—経済・政治・財政の諸範疇をめぐって』未来社、一九七六年。

北垣徹『連帯』の理論の創出—デュルケームを中心として、『ソシオロジ』第三七卷、第三号、一九九三年、五九―七六頁。

北垣徹『新たな社会契約—フランス第三共和政期における福祉国家の哲学的基礎—』、『ソシオロジ』第四〇卷、第一号、一九九五年、六九―八七頁。

木下賢一『第二帝政とパリ民衆の世界—「進歩」と「伝統」のはざままで—』山川出版社、二〇〇〇年。

喜安朗『夢と反乱のフォブル』山川出版社、一九九四年。

喜安朗『近代フランス民衆のへ個と共同性』平凡社、一九九四年。

河野健二編『資料フランス初期社会主義—二月革命とその思想』平凡社、一九七九年。

河野健二編『資料フランス革命』岩波書店、一九八九年。

クリューガー他『確率革命—社会認識と確率』梓出版社、一九九一年。

ラブラス(内井惣七訳)『確率の哲学的試論』岩波文庫、一九九七年。

ロム、ジャン(木崎喜代治訳)『権力の座についた大ブルジョアジー—十九世紀フランス社会史試論』岩波書店、一九七二年。

ルークス、ステイヴン編(厚東ほか訳)『人というカテゴリー』紀伊国屋書店、一九九五年。

マナン、ピエール(高橋、藤田訳)『フランス自由主義の政治思想』新評論、一九九五年。

マルサス(永井義雄訳)『人口論』中公文庫、一九七三年。

松浦義弘『フランス革命史の復権にむけて—「アナール派」をめぐる新しい政治史』『思想』、第七六九号、一九九八年、二八―五四頁。

松浦義弘『フランス革命の社会史』山川出版社、一九九七年。

馬渡尚憲『経済学史』有斐閣、一九九七年。

マルクス(中原稔生訳)『フランスにおける階級闘争』大月書店、一九六〇年。

マルクス(村田陽一訳)『レイ・ボナパルトのブリュメール一八日』大月書店、一九七一年。

マルクス(木下半治訳)『フランスの内乱』岩波文庫、一九五二年。

マルクス(向坂逸郎訳)『資本論』全九巻、岩波書店、一九六九―一九七〇年。

メイヤー、J. (五十嵐豊作)『フランスの政治思想―大革命から第四共和制まで』岩波書店、一九五六年。

ミシュレ(桑原ほか訳)『フランス革命史』『世界の名著37 ミシュレ』中央公論社、一九六八年。

中木康夫『フランス政治史(上)(中)(下)』未来社、一九七五年。

中村睦男『社会権法理の形成』有斐閣、一九七三年。

中野隆生『日本におけるフランス労働史研究(特集・労働史研究の現在―一九八〇―二〇〇〇年)』『大原社会問題研究所雑誌』第五一六号、

二〇〇一年、二五―三六頁。

大塚桂『フランスの社会連帯主義―L. デュギーを中心として』成文堂、一九九五年。

小田中直樹『フランス近代社会―一八四―一八五二』木鐸社、一九九五年。

小田中直樹『歴史学のアポリア―ヨーロッパ近代社会史再読』山川出版、二〇〇二年。

隠岐さや香『一九八〇年代のバリ王立科学アカデミーと『政治経済学』』『哲学・科学史論叢』(東京大学教養学部哲学・科学史) 第三号、二

〇〇一年、九五―一八頁。

パーソンズ、タルコット(稲上・厚東訳)『社会的行為の構造 3 デュルケーム論』木鐸社、一九九二年。

パストゥール(山口清三郎訳)『自然発生説の検討』岩波文庫一九七〇年ポーター、T. M. (長尾他訳)『統計学と社会認識―統計思想の発

展、一八二〇―一九〇〇』梓出版社、一九九五年。

リーデル、マンフレート(河上、常俊訳)『市民社会の概念史』以文社、一九九〇年。

リングラー、F. K. (筒井ほか訳)『知の歴史社会学―フランスとドイツにおける教養―一八九〇―一九二〇』名古屋大学出版会、一九九

六年。

ロジャーズ、B. (美馬孝人訳)『貧困との闘い―貧困法から福祉国家へ』梓出版社、一九八六年。

坂上孝『近代的統治の誕生』岩波書店、一九九九年。

スミス、アダム(米林富男訳)『道徳情操論』全二巻、未来社、一九六九年。

シュタイン、ローレンツ・フォン『社会主義と共産主義』法政大学出版局。

シユムペーター(中山・東畑訳)『経済学史—学説ならびに方法の諸段階』岩波文庫、一九八〇年。

ソブール、アルベール(小場瀬卓三、渡邊淳訳)『フランス革命—一七八九—一七九九』岩波書店、一九五三年。

ソブール、アルベール(山崎耕一訳)『大革命前後のフランス—経済と社会』法政大学出版局、一九八二年。

田端博邦『フランスにおける社会保障制度の成立過程』東京大学社会科学研究所編『福祉国家—福祉国家の展開(二)』東京大学出版局、一九八五年。

高橋幸八郎『近代社会成立史論—欧州経済史研究』日本評論社、一九四七年。

高橋幸八郎『市民革命の構造』御茶の水書房、一九五〇年。

高木勇夫『ブルジョワ・イデオロギー研究—フランス学士院・道徳政治科学部門(一七九五年—一八〇三年)—長谷川博隆編『権力・知・日常—ヨーロッパ史の現場へ』名古屋大学出版会、一九九一年、一四七—一七四頁。

高木勇夫『ブルジョワ・イデオロギー研究(四) 道徳政治科学アカデミー道徳部会の懸賞論文課題』『名古屋工業大学紀要』第四四卷、一九九二年、一九—三〇頁。

高草木光一、『ルイ・ブラン』『労働の組織』と七月王政期のアソシアシオニスム—普通選挙と『社会的作業場』『三田学会雑誌』第八七卷第三号、第四号、一九九四—一九九五年。

田中拓道『西洋政治思想史におけるE. デュルケム—『社会』概念による『政治』の再構成の試み—(一)(二・完)』『北大法学論集』第九卷、第二号、二〇七—二五七頁、第三号、一七—三二頁、一九九八年。

田中拓道『「連帯」の思想史のために—一九世紀フランスにおける慈善・友愛・連帯、あるいは社会学の起源—』『政治思想研究』第三号、二〇〇三年、九七—一四頁。

田中拓道『フランス福祉国家論の思想的考察—「連帯」のアクチュアリティ—』『社会思想史研究』第二八卷、二〇〇四年、五三—六八頁。

谷川稔『フランス社会運動史—アソシアシオンとサンディカリスム』山川出版社、一九八三年。

谷川稔『十字架と三色旗—もうひとつの近代フランス』山川出版社、一九九七年。

テュデスク、アンドレ(大石明夫訳)『フランスの民主主義—一八一五年以後—』評論社、一九七三年。

都留民子『フランスの貧困と社会保護—参入最低限所得(RMI)への途とその経験』法律文化社、二〇〇〇年。

富永茂樹編『資料権利の宣言—一七八九』京都大学人文科学研究所、二〇〇一年。

山本桂一編『フランス第三共和政の研究』有信堂、一九六六年。

ヴォヴォル、ミシエル（立川孝一ほか訳）『フランス革命の心性』岩波書店、一九九二年。

吉田克己『フランス住宅法の形成―住宅をめぐる国家・契約・所有権』東京大学出版会、一九九七年。

（附記）

一 本稿は、北海道大学審査博士（法学）学位論文（二〇〇三年十二月二十五日学位授与）に補筆したものである。

二 本稿は、一九九八年度―一九九九年度の文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）、二〇〇三年―二〇〇四年度および二〇〇五年度科学研究費補助金（若手研究B）による研究成果の一部である。